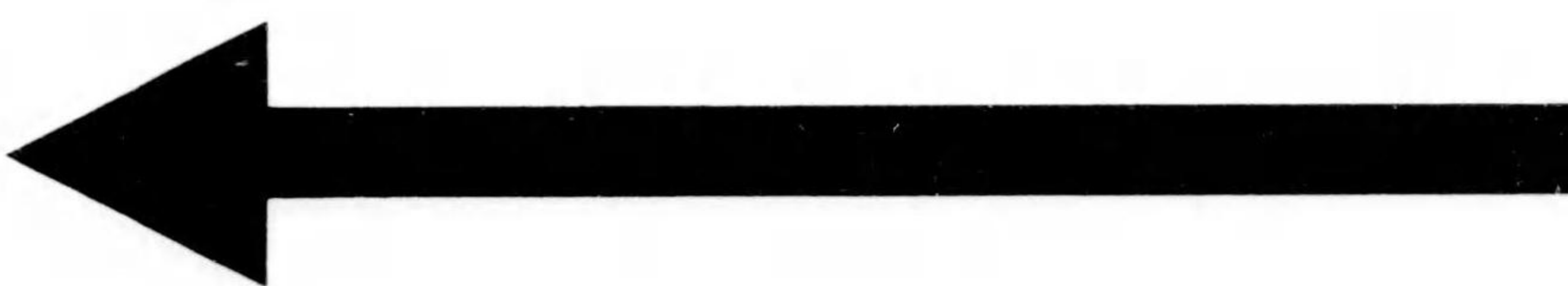
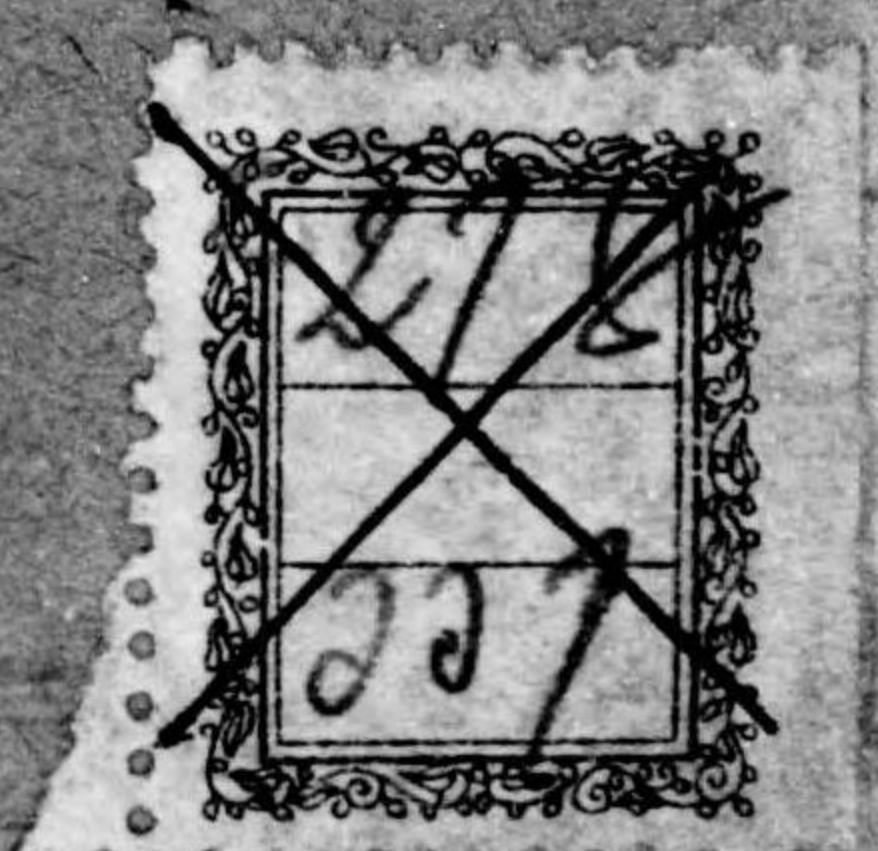


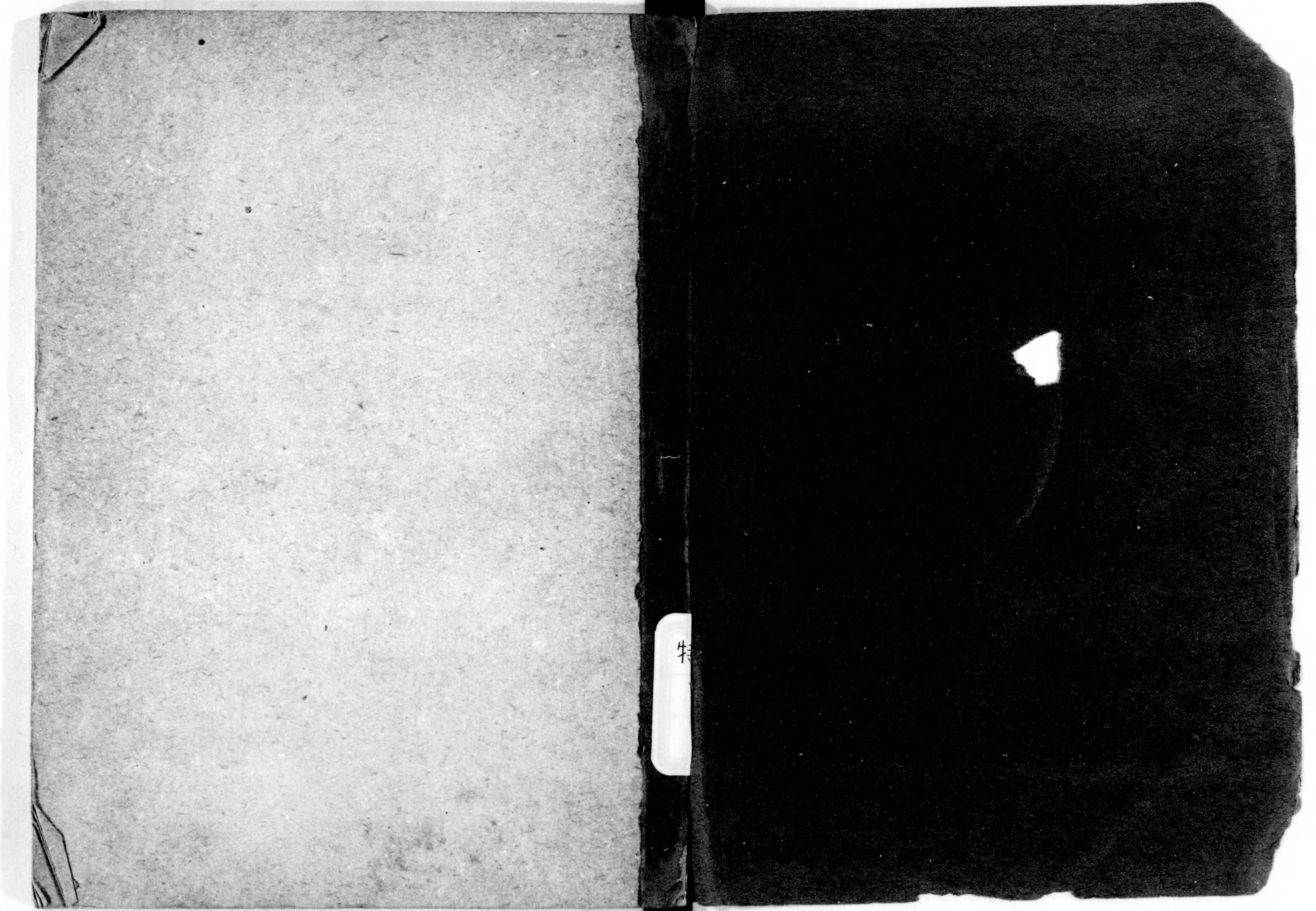
始



修道者の心得



特



特

特100
487



修道者の心得

大正
4. 7. 14
内交

長崎司教認可

序言と目次

本編は主として、長崎教区内に設置されてある無誓願の女子修道團の心得にもと思つて、聖アルホンソから抄譯したのであるが、然し何れの修道團に屬する人の爲にも、多少の参考とならぬものでもあるまい。目次は左の如し。

緒言

- 一、修道者は主の淨配である。 一
- 二、修道者は十字架を擔ぐの覺悟でなければならぬ。 九
- 修道者の心得に就ての黙想。 二二
- 一、修道者には救靈が極めて安全である。 二二

- 二、修道者の終焉は極めて平穩かである。 二九
- 三、主の御招きに應はなかつた人は何んな恐るべき審判を受けねばならぬか。 三八
- 四、主の御招に應はない人の蒙るべき地獄の苦罰。 四三
- 五、天國に於て修道者に與へらるゝ無量の光榮。 四八
- 六、熱心な修道者の賜はる心の平安。 五六
- 七、冷淡なる修道者の危険いこと。 六四
- 八、一身を擧げて主に献げざれば、その御寵愛を蒙ること出来ない。 七三
- 九、聖人となるには熱い冀望が必要である。 七九

附録

- 十、主の愛に酬ゆるに愛を以てせよ。 八七
- 十一、聖體と同居するを得る修道者の幸福。 九五
- 十二、修道者の境遇は最も主イエズスの夫れに近い。 一〇二
- 十三、修道者は人の救靈を熱望まねばならぬ。 一〇九
- 十四、修道者は柔和謙遜ならねばならぬ。 一一四
- 十五、修道者は特別に聖母の御保護を蒙られる。 一二二
- 一、人生の果敢いこと。 一二七
- 二、死。 一三三
- 三、審判の準備を怠つてはならぬ。 一三八

(4)

四、修道者の審判。 一四三

五、天國の道。 一四七

六、イエズス様の聖心に不愉快と思召し給ふ事。 一五二

七、静修の終末の聖體拜領。 一五七

八、感ずべき一少女の物語。 一六五

九、吾主の御涙。 一七三

目次 (終)

修道者の心得

緒言

一、修道者は主の淨配である。

(1)

主イエズスに一身を献げて、立派に不犯を守つて行く人は、聖人等から『肉體ある天使か、肉體なき人間か』とまで讃め嘯されるのであるが、然しよくよく考へて見れば、天使は肉體を有たない、食へもせねば飲みもせず、情慾と云ふものは全く知らないから、彼等には傲慢に向つてこそ戦ふ必要はあつたが、肉慾の誘に罹る憂は露ばかりもなかつたのである。我等は之に反して、内からも外からも恐ろしい敵に

(4)

四、修道者の審判。 一四三

五、天國の道。 一四七

六、イエズス様の聖心に不愉快と思召し給ふ事。 一五二

七、静修の終末の聖體拜領。 一五七

八、感ずべき一少女の物語。 一六五

九、吾主の御涙。 一七三

目次 (終)

修道者の心得

緒言

一、修道者は主の淨配である。

(1)

主イエズスに一身を献げて、立派に不犯を守つて行く人は、聖人等から「肉體ある天使か、肉體なき人間か」とまで讚め囃されるのであるが、然しよくよく考へて見れば、天使は肉體を有たない、食へもせねば飲みもせず、情慾と云ふものは全く知らないから、彼等には傲慢に向つてこそ戦ふ必要はあつたが、肉慾の誘に罹る憂は露ばかりもなかつたのである。我等は之に反して、内からも外からも恐ろしい敵に

取圍まれて居るので、身も心も清淨に保ち、之を少しでも汚さない爲には、随分と激しい戦を経ねばならぬ。随つて清淨潔白な童貞は、少くも其の努力の點から見れば、天使よりも一段上位だと言つても差問ない譯である。

管に天使よりも上位であるのみならず、實に主の淨配とさへ呼ばれるのである。聖パウロはコリント人に書を送つて「汝等を一人の夫に於ける潔白なる少女として、キリストに婚約したり」(コリント後一)と曰ひ、聖會は童貞を讃めて「來れキリストの淨配よ、主が汝の爲に永遠に備へ置かれし冠を得よ」と歌つて居る。主も嘗て聖女 テレジアに現れて「汝は今から我が淨配として、専ら我が名譽を計れ」と曰うた。或る聖女には婚約の印として、指輪までも嵌めてやつて下さつたこと

がある。

賤しい農夫漁人の娘が帝王から寵愛され、その妃に取立てられると云ふならば、幾れほど驚きもすれば喜びもするであらうか。然るに童貞の身になると、數ならぬ下婢の賤を以て主イエズスの淨配に迎へられる、天地の王、萬物の御主を我が愛する天夫に戴くのである。その幸福なり、名譽なり、世界に比びなしと云つても過言ではあるまい。されば聖女アグネスはローマの知事の令息から縁談を持掛けられても「私にはもつとく優れた許嫁の夫がありますから」と曰つて、きつぱりと謝絶つて了つた。聖女ドミチアはドミチアン皇帝の姪であつたが、アウレリアヌスと云ふ貴族に嫁ぐやう百方と勧められても、頭を打掉つてなかく承知しない、「大國の王様を捨て、名もない農夫に

(4)

嫁ぐ馬鹿ものが何處に居りませうか。私はアウレリアヌスさんに
從へば、勢ひ天主様を遣てねばなりません。そんな割の悪い話があり
ますか」と曰つて、終には二つとなき生命さへも抛つたと云ふことで
ある。

凡そ身を修め徳を積むには、なるべく世間に遠かり、屢々秘蹟を拜
領り、祈禱、黙想に肝いり、艱難病苦をちつと堪へ忍び、専ら主の聖
意に適ふやう務めなければならぬ。然し家を有ち、子を有つて居る婦
人に何うして夫が出来るであらう。聖パウロは曰つた「婚姻せざる女
と童貞女とは、身も心も共に聖ならん爲に主の事を思ひ、婚姻したる
女は如何にして夫を喜ばしめんかと世の事を思ふなり」(コリント前)
實に婚姻した婦人は、唯だもう夫の身の上、子供の教育、日々の生活

(5)

向きなどに心を奪はれて了つて、逆も緩りと祈禱をしたり、毎朝の様に
ミサ聖祭に參與つたり、屢々秘蹟を授つたりする餘裕はない。お負けに
良人の宅に出入するものは善人ばかりではなく、飲酒家もやつて來れ
ば、放蕩者も舞ひ込んで來るのに苦い顔も見せず、愛嬌を振り蒔いて行
かねばならぬ。然うして居る中には、自分の心までが何時の間にか變挺
になつて、信仰は薄らぐ、主には遠かる、罪を恐れる氣も鈍くなる。終
には救靈までも危くすると云ふ始末に立至らぬにも限らないのであ
る。それから見ると童貞の身分は幾れほど幸福であらうか。良人の機
嫌を伺ふことも要らねば、子女の教育に肝いりする必要もない。況んや世間
を棄て修道院に入り、一身を主に献げる幸福でも得て居る童貞は、現
世の事物に心を引かれる氣遣ひもなく、唯だ仰ぐ所は天國である。唯だ

思ふ所は主イエズスである。その日々の務は祈禱である、黙想である。聖體を拜領したり、訪問したりすることである。なるほど其間には勞働もしよう、苦痛にも遭はう、疾病にも艱まされよう。然し兼ねなく敬虔に身を固めて居るから、如何なる災難でも、主より賜はる十字架として難有く推し戴くことが出来るので、少も辛い思ひはしないのである。

貞童の身分は斯くまで優れて居るので、主の御寵愛を辱うすることも一通りではない。主が御子を世に遣はし給ふに當つて、その母君と擇み給うた女は、清淨で、潔白で、邪慾に曳かされる憂すらなき童貞聖マリアで、貞童でありながら御子を孕し、童貞でありながら御子を産むと云ふ特典までも之に與へ給うた。して此の御母の側に置き給

うたのは何人であつたかと云へば、やはり身には不犯を守り、清淨の鑑と仰がれ給ふ聖ヨゼフであつた。御子も亦た罪の汚に染まな、未だ邪慾の萌さへなき幼兒を殊更に愛し給ひ、「汝等もし翻りて幼兒の如くに成らずば、天國に入らざるべし」(マテオ)と繰り返し、教へ給うた。十二使徒の中でも、獨身の聖ヨハネを一番可愛がつて、御死去の折には、この童貞なるヨハネに童貞なる御母を托け給うた位であつた。

終に天國に於ても、童貞に限りて賜はる特別の褒賞がある。聖ヨハネの黙示録を繙いて見れば、「彼等新らしき讚美歌の如きものを謳ひ居りしが、地上より贖はれたる彼の十四萬四千人の外、誰も此の讚美歌を唱ふること能はざりき。彼等は婦に觸れず、汚されざるもの、蓋し童

貞者たるなり。彼等は何處にもあれ、羔の往き給ふ所に従ふ(黙示録)と録されてある。身に汚點なきものは聲までも清く涼しく聞ゆるので童貞等の謳はれる讚美歌の聲は、他の聖人等の聲の中でも、殊更ら優れて美妙に響き、天國の隅から隅まで鳴り渡るのであらう。

生きては『主の淨配』と稱せられ、死んでは他の聖人等の歌ふ能はざる新らしき讚美歌を謳ひ、主に最も近く侍つて、その往き給ふ所に従ひ廻る童貞の身ほど幸福なものが世に又とあるであらうか。然し唯だ童貞である、婚姻をしない、修道院に入ると云ふ丈けでは足りない。世間の情愛を振切つて、一身を主に献げ、『主の淨配』となつた以上は、それに相當する丈けの童貞となり、身を盡し心を盡して、天夫たるイエズスを愛し、生きても死んでも變らない誠意を表さねば

ならぬ。世間の人が世間を慕ひ、世間を思ふが如く、童貞は唯だ天夫たるイエズスを慕ひ、唯だ主たるイエズスを思はねばならぬ。随つて修道者となりて一身をイエズスに献げてからは、家柄の貴き賤しき、才智の多い寡い、學問の有る無し等を氣にするには及ばない。唯だ何うしたならば主の聖旨に適ふことが出来ようか、何うしたならば益々謙遜となり、清貧を守り、從順に秀で、主の聖心を喜ばせ申すことが出来ようかと云ふことにのみ眼を注ぎ、互に勵み勵まされるが肝要である。

二、修道者は十字架を擔ぐの覺悟であらねばならぬ。

世間を離れて修道院に入り、童貞を守りて、主の淨配に選まれるのは、天主の特別の聖恩で、幾ら感謝しても足りないのである。然し修

道院に入つたばかりで、其日から直に立派な修道者、主に相當な淨配になれる譯ではない。猶ほ主イエズスの御足の跡を踏んで、世間の快樂に遠かり、苦痛を甘んじ、凌辱を喜んで行かねばならぬ。『人もし我後に跟きて來らんと欲せば、己を捨て、己が十字架を取りて我に従ふべし』(一六ノ二四)と主も曰うたではないか。されば修道院に入る時は苦んで苦んで大に苦まうと云ふ覺悟で居ないと、後で貧しい術ない生活をするのが厭になつて來て、終には惡魔の誘惑に打負かされるに至らんかも計られないのである。

人によつては、修道院に入るのは身を修め徳を研いて、完全な修道者となるが爲めだと云ふことは少つとも思はないで、唯だ家族を養ふ義務を免れ、衣服や食物の世話も要らず、全く安心だからと云ふこと

丈けを考へて居るやうである。素より修道院に入ればそんな世間の煩はしい心配を遁れ、心安々と天主に仕へられる。他人の美しい手本も見られる、長者の難有い教訓も受けられる、色々と救靈に必要な敬虔の務も盡される。然し亦た夫れと共に随分と苦勞を見て、我身に克ち、邪慾を抑へる覺悟で居なくてはならぬ。主は曰うた、『勝ちたる者には隠れたるマンナを與へん』(黙示二)と。されば

一、修道者は我身の安樂を希うてはならぬ。

修道者は早や清貧の願を立て、居るにせよ、未だ立て、居ないにせよ、兎に角、清貧に生れ、清貧に死に給うた主イエズスに倣はうと志すのであるから、清貧を愛し、その清貧より出て來る不便、不自由までも快く耐へなければならぬ。『貧困其物を愛しなければ、貧困である

ばかりが徳ではない」と聖ベルナルドは曰つた。多くの人はただ清貧と云ふ點だけ主に似寄りたい。即ち清貧の不自由は感せずして、清貧の名譽と報酬だけを待たいものと考へて居る様であるが、それこそ頓でもない思違であらう。

修道者は柔かい絹布だとか、珍しい食物だとか、貴重な器物、餘計な贅澤物だとかを使つてはならぬ。唯だなくて叶はぬ必要な品だけに満足せねばならぬと云ふことは、何人しも承知して居る。然し衣物にせよ、食物にせよ、必要なのさへ缺乏する場合にも之を能く堪へて、吐きもせず口説きもせずしてこそ始めて『清貧を愛する修道者だ』と曰はれるのである。清貧の看板を掲げて居る修道者の身でありながら、一つの不自由な目にも遣はないやうでは何の功があるであらう、心より

清貧を愛するならば、その結果たる寒さや、饑さや、侮辱や迄も愛せねばならぬ筈ではあるまいか。

されば修道者たる者は、すべて規則によりて供給はれるものを甘んじ受け、それ以外を求めてはならぬ。時としては夫れさへも不充分で、少つとやそつと困るやうなことがあつても、心より満足して夢にも苦情を陳べたり、口惜しがつたりしてはならぬ。主の御家に入つたのは、善い待遇を受ける考からではなかつたらうし、却て困苦や缺乏やを堪忍ぶ覺悟であつた筈であるのに、それしきの事が堪へられないやうでは、寧ろ頭から修道者にならなかつた方がましであらう。

二、親兄弟に心を引かされてはならぬ。

親に離れ、兄弟に離れて、修道院に入つた以上は、唯だ主イエズス

を父とし、聖母マリアを母とし、諸聖人を兄弟姉妹として、専ら天國の爲に働かねばならぬ身であれば、必要もないのに親兄弟の宅に足を踏み入れてはならぬ。

聖ウキンセンシオ、ア、パウロは曰つた、『自分の生里やら、父母の宅やらを餘り氣にする人は、徳の途に進むことは出来ない。多くの人は、我里へ歸ると、我家の利益問題に心を奪はれ、家族と喜、悲を共にするやうになり、ちやうど蠅が蜘蛛の網にでも掛つたかのやうに何うしても遁れること出来なくなる。私は父母に救靈の道を教へ、餘り財寶に心を奪はれない様、私から何うかして貰はうと夢にも思はないやうに論ず考で、自宅へ歸つて十日ばかりも居つた。所が愈々自宅を出る時には、父母に訣れるのが辛くなつて来て、途々泣いて歸つた。

それと共に父母を救けて上げたら、今ま少し善い生活をさして上げたらと云ふ思が連りに起つて、三ヶ月ばかりと云ふものは、五月蠅くて堪らなかつた。漸く天主様に祈つて、その御憐を蒙り、此誘惑を遁して戴くことが出来たのである』と。

されば病に罹つた時でも、直に自宅へ歸つて養生したらと思つてはならぬ。『修道院の厄介になるのが氣の毒だから、自宅で養生する』と云ふ人があるが、修道者の世話は修道院で焼くのが當然で、たとへ必要品物を賣拂つてでも、病人を困らせないやうにせねばならぬのである。もし萬一主の聖意に因つて死ぬことにでもなつたら、猶更の事、自宅で親兄弟に介抱されて死ぬよりか、主の御家で、修道者等に世話されて死ぬ方が、幾れほど嬉しいことであらうか。

三、自愛の念を絶たねばならぬ。

多くの人は喜んで己が生里を棄て、親兄弟を棄て、身の安樂を棄てたは棄てたものゝ、自愛の綱を断り棄てることを知らないやうである。最も主の聖意に適ふ犠牲は、財寶や快樂や家族やを棄てるのよりか寧ろ我身を棄てることであつて、我身を棄てるのは、主が第一に己が弟子たるものに要求し給ふ所である。して我身を棄てるが爲には、名譽心を足るの下に踏み附けて、如何なる賤め、辱めでも喜んで推し戴く覺悟にならなければならぬ。例へば他人は才智もなければ學問もないのに自分よりも重用じられ、自分は却つて何一つ出来ないものとして輕視じられるとか、自分には極めて賤しい困難な仕事ばかりを命じられるとか云ふ場合にも、自愛の念を棄て、喜んで之に従はねばならぬ。主の御

家に於ては、如何なる職務でも、自分に命ぜられるのが一番名譽なのだ云ふことを深く自ら信じて、夢にも人の目に立つ様な役目を望んではならぬ。望む振を見せてもならぬ。なるほど修道者も人間である以上は、人に嘲けられたり、輕んじられたりしたら、時には腹がむつとして、顔色までも變るやうなことがないにも限るまいが、それでも我と我心をしつかり取押へて、快くその輕侮、凌辱を受け堪へねばならぬ。長上からでも、同輩からでも、部下からまでも、何につけ彼につけ始終咎められ、苦しめられながら露ばかりも不平の色を顯さず、却て咎めて呉れた人に心から感謝を述べ、是からは斯う云ふ過失に陥らないやうに注意しますから』と云ふ位にならなければ、眞正の修道者とは申されない。

聖人等の現世に於ける第一の願は主の爲に辱められることであつた。主は一日十字架を肩にして、十字架の聖ヨハネに顯はれて、『ヨハネ、汝は何が欲しいか』と尋ね給ふや、ヨハネは直に、『私は主の爲めに苦められ、辱められることを願ひます』と答へた。謙遜の徳の最上段は賤しめられるのを喜ぶにあるので、一たび主の爲に輕侮、凌辱をぢつと耐へるのは、數々の斷食や苦行やを行ふよりか、餘つばど價値があるのである。

要するに反對されたり、輕侮られたりする時に、目を瞑つて快く耐へきれないやうな修道者は、完徳に進むこと出来るものではない。一身を抛つて修道者となり、主が自分の爲め凌辱に飽され給うたことも充分に承知しながら、主の尊前で『もう今からは我身に死にます』と

立派に約束までして居ながら、少しの凌辱でも堪へること出来ないことであつては、何うして我身に死んだものと言はれよう。兎もあれ己に愛着して、自愛の念を絶つこと出来ないやうな人は、修道院に入つてはならぬ。既に入つて居るならば、他人に其毒を感染さない中にさつさつ出て了ふが可い。

四、我意を絶たねばならぬ。

修道者は全く我意を棄て、従順の徳を完全に行はねばならぬ。主に献げる犠牲の中に、是ほど大切で、亦た是れほど御氣に召すものはない。身の安樂でも、親兄弟でも、名譽までも振棄てたにした所で、もし我意を棄て得ないならば、何の役に立つであらうか。己を棄てるとか、己に死して一身を主に献げるとか云ふのは、取りも直さず我意

を棄てることで、主が修道者に要求し給ふ所も實に此一事に約まるのである。他に幾ら苦行をし、祈禱や默想に肝煎つても、我意を棄てない限りは、それが別段益になるものではない。我意を絶ちてこそ始めて其の行爲に價値があり、主の聖意にも適ひ、主と共に『我は恒に聖意に適へることを爲す』(ヨハネ八)と云ふことが出来る。實に我意を絶つた修道者は、勉強するにも、默想するにも、食べるにも、休息むにも、一々修道院の規則に従つてするのだから、何時でも主の聖意を行ふ譯になるのである。

世間に在る人も随分と善業を行ひ、主の爲に苦勞艱難を凌がぬではないが、然しその善業を行ふ中にも我意が入つて居るから、修道者の、ほごには、主の聖心に適ひもせねば、功德にもならないのである。

そこで修道者は決して一度でも『私が望む』の、『私が望まない』の口から出してはならぬ。たとへ長者から望を問はれても『私は斯う望みます』と曰はないで『命せられることを望みます』と答へねばならぬ。又た命せられることが明に罪でない限りは、理由など尋ねずに、盲目的に従はねばならぬ。自分の判断を長者の判断に従はせないで、理由など尋ねてから、しぶくことには従ふのは完全な従順ではない。されば修道者たるものは、自分の厭やに思ふことを命せられても喜んで之を爲し、自分の望む所を謝絶られても喜んで之を耐へる覺悟であらねばならぬ。例へば祈禱をしたと思ふ時に、外に出て働かされることがある。そんな時には、従順によつて行ふ所は皆な祈禱であると思ひ、飛び立つて之に従はねばならぬ。然うしてこそ始めて、我意を

抛つて十字架に釘けられ給うた主イエズスの眞正の弟子と云ふことが出来るのである。

約めて言へば、修道者たる者は『主の淨配』として、一方ならぬ御寵愛を蒙るのであるが、亦たそれと共に主に倣つて痛苦を受け、凌辱を堪へ忍ぶべきものと覺悟せねばならぬ。以上は一般に修道者の心得を述べたわけで、是からは一步進んで、修道者の救靈の安全なる、死去の平穩なる、報酬の大なる事、その避くべき危険、勵むべき德行などを一々順を追うて、默想の體に綴つて見ようと思ふ。

修道者の心得に就ての默想

一、修道者には救靈が極めて安全である。

救靈の如何に大切であるかと云ふ事は、一寸信仰の眼を開いて見たばかりでも分る。靈魂は唯一つきりで掛換はない。この靈魂を一たび失つた日には、もう總を失つたので、何一つ遺る所はないのである。『人たとひ全世界を儲け得とも、其靈魂を失はば何の益かあらん』(マテオ、一)此の有名な聖言に感じて、花の盛りの身を持ちながら、潔く浮世を振り棄て修道院に引籠るやら、人なき荒野に隠遁れるやら、主の爲にその二つとなき生命を抛つやうした人々は、昔から指折り數へるに違ないほごである。

彼等は實に考へたのである、今の中に全世界を掌に握り、有ゆる榮華を極めるとしても、それはホンの束の間のことで、もしや後で地獄の底に投げ込まれ、終なく苦むやうな破目にでも陥つたならば、果

して何の益があらうぞと。實際然うである、今はたとへ幾萬の富を重ねて居た所で、今はたとへ學者でゐるの、帝王でゐるのと威張つて見た所で、もしや不幸にして地獄に罰されることにでもなつたら、その重ねて居る幾萬の富も、その威張つて居る學問も、帝王の位でも、一つとして遺る所はない。唯苛い苦罰に惱され、恐ろしい失望の悲痛に悶へつ、過ぎ去つた浮世を顧みて、「あゝ萬事は影の如く過ぎ去れり」(智書五)と泣き口説くばかりであらう。ほんたうに萬事は影の如く、夢の如く過ぎ去つて了ふ。たゞ地獄の苦罰、悲痛だけが、何時迄も續き續いて終なく引續くのみである。

『此世の姿は過ぎ行くなり』(コリント前)。(三ノ三一) 過ぎ去つて了ふとすれば、たとへ此世では貧乏をしても、輕蔑されても、迫害られても、後で直

ぐと歡樂に光榮に充溢れ、天の王様と崇められ、何時までも「天主が天主にて在す限り、云ひ知れぬ福樂を享けられる身の上となることさへ出來れば、何の損があるであらう。主が我等を造つて現世に生存へさして下さるのも、結局世間の儂い財を積ませ、快樂を漁らせる爲ではなく、唯だゞ天の終なき貨を求めさせ、千代に八千代に歡樂ませたいと云ふ思召からである。

現世に生れ出た以上は、誰しも此目的に向つて側目もふらずに進まねばならぬのであるが、悲しいかな、斯う云ふ大切な問題を丸で考へもしない人が世にはなかく多い。世間の闇いゝやみの中に彷徨つて、唯だゞ名聲を發揚しよう、快樂を攫まうと急つて、知らず識らずの中に地獄へ飛び込んで了ふものが引さもさらずあるのである。『全

地は荒れに荒れたり、一人も顧るものなければ』(エレミア)とエレミア預言者が言つて居るが、實に死ぬ時の事など考へる人は極めて少い。死ぬ時に自分の生命の舞臺の幕が切つて落されることだの、行先には終なき生命が待ち構へて居ることだの、主が自分を愛して、自分の爲に成し下さつた驚くべき事業だのを想ふ人は至つて少い。随つて多くの人は主に遠かり、禽獸見たやうに、ひたすら地上の財寶、福樂を眺めるばかりで、仰いで天を觀たり、主を懷つたりすると云ふこともなく、主を愛したい望も起さず、終なき生命と云ふ考さへも心には浮べない、斯うして彼等は終に不幸な最期の岸に到着する、終なき滅亡、窮りなき禍殃の峻ち伏せして居る最期の岸に到着するのである。到着してから漸つと眼を醒すであらうが、然しもう其時は晩過ぎる。

たゞ何時迄もく自分の馬鹿げて居たことを悔恨しがるより外はないのである。

然るに修道院には、此の大切な救靈の道がチャント備はつて居る。『汝の終を想へ、然らば永遠に罪を犯さざらん』(會衆書)と聖書にもある通りに、四終などに就いて絶えず黙想するのは、聖寵の生命を保ち、救靈を全うするに極めて肝要である。所が何の修道院にも、毎日く永遠の大問題を黙想するやうになつて居る。随つて修道者は始終天の聖光を受けて居るから、何うしても長く主に遠り、後世に旅立する用意もせず罪科の恐ろしい闇黒の中に、安閑として座つて居られなくなるのである。

祈 禱

主よ、私は他の人々にも優つた大悪人で、大變に主に背いたものであれば、とてもく御惠を忝うするに堪へるものではない。それに何うして他の人々は浪風荒い世間の大洋中に打棄て置きながら、私をば御家に召し入れて、親しく主に仕へるの幸福を與へ給うたのであらう。主よ、是れはく如何に勝れて難有い御惠であるかと云ふことを、私に深く悟らして、絶えず感謝の念を失はざらしめ給へ。

主は斯う云ふ大恩を私に施し、他の人々に超えて特別に私を愛し給ひたれば、私も亦た他の人々に超えて忠實に主に仕へ、一心と主を愛せねばならぬ。主よ、私が全く主のものとなるのは、主の御望であれば、今ま私は一身を残らず御手に献げ奉る。何とぞ之を受取つて私を全く主のものとなし、何時迄もく私を保有つて、御側を離れざら

しめ給へ。此の事業は主の着手め給うた所、之を果すの聖寵をも惠み給へ。主は私を聖人ともなさうと思召して、御家に召し入れ給うたのであれば、是非とも聖意に適ふだけの人物とならしめ給へ。

永遠の御父よ、私は御子イエズスに縋つて此の御惠を偏に願ひ奉る。何とぞ御子に對して私の願を聽入れ、御父を一心と愛さしめ給へ、あゝ主よ、私の一心と愛し奉る主よ、私は主を愛し奉る。私はたゞ主ひとりを愛し奉る。何時迄もく愛し奉る。

私の信頼なる聖マリアよ、何とぞ私を扶けて、何時迄も何時迄も忠實に御子に仕へさせ、其大恩を忘れざらしめ給へ。アメン

二、修道者の終焉は極めて平穩である。

『主の中に死するものは福なる哉』(黙示録一、四ノ二三)、主の中に死する福

なものは、取りも直さず修道者ではあるまいか。世間を離れ、修道院に引籠り、世間の貴ぶ財寶や、快樂には疾くに暇乞をして了つた修道者ではあるまいか。

あ、汝は主の御招に應つて修道者となり、主の御家で死するの幸福を得たらば、如何に満足に思ふであらうか。固より悪魔は汝の耳に囁いて曰ふかも知れぬ、『お前が修道者となつたならば、後で後悔する時があるぞ、なせ我家を棄てた、なせ我村を離れた、父母は私を頼にして居られたのに、なせ宅に残留つて父母を扶けなかつた、と口惜しく思ふ時があるに相違ないぞ』と言つて、汝を惑はさうとするかも知れぬ。

然し胸に手を當て篤と考へて見るが可い。死ぬ時になつたら、今の

決心を實行うたことを残念に思ふであらうか、將た慶ぶであらうか、死んで主の法廷に召し出されると云ふ段になつたならば、孰れの途を進んで行つたことを満足に思ふであらうか、己が父母を安心させ、己が家族を扶けたことであらうか、我宅に残留つて榮耀を盡し、愉快を極め、人には敬ひ尊ばれて、氣儘勝手に世を渡つた揚句（もし夫れが出来る身の上であれば）、父母兄弟に取巻れて死ぬ事であらうか、抑は又た主の御家で、修道者等の中で、自分を勧め、勵まし、手を引いて安穩に天國の向岸へ渡して呉れる兄弟姉妹等の中で死ぬことではあるまいか。幾年の間、修道院に隠れ、世間のものは一切手を斷つて、謙遜を力め、堪忍を勵み、身を責め懲し、財寶に訣れ、父母兄弟に遠く離れ、自分の意志を抛つて専ら他人の意志に服従うた上で、平けく、安

けく、躍り喜びつゝ死ぬことではあるまいか。

聖ベルナルドは曰つた、「世間の快樂を樂としない人は、現世を立つのに何の苦も覺ゆるものではない」と。教皇ホノリウス二世は死に際になつてから、「あゝ朕は教皇となる代りに、修道院に踏み留つて、椀皿を洗ふ様な賤い役目を勤めて居たら可つたのに！」と嘆息された。西班牙王ヒリツポ二世も、「王とならずに身分賤しい修道者ともなつて天主様に仕へて居たならば、如何に幸福であつたらうものを！」と曰つた。其子のヒリツポ三世も叫んで曰つた、「あゝ朕は王とならずに、野山に引籠つて修道者となり、一心と天主様に仕へて居たならば、幾れほど安堵して主の裁きの庭に立ち出づるであらうに！」と。

此世で一番幸福な者と我も思ひ、人も思つて居る帝王すらも、死に

臨めば斯う曰ふのである。されば悪魔が汝を誘かして、主の御招に従はせまいとする時は、死ぬ時を思つて見るが可い。汝の運命の定まるべき彼の恐ろしい最期の時を考へて見るが可い。それさへ考へたら、屹と如何なる誘にでも打勝つて、忠實に主に事へ奉ることが出来るであらう。死ぬ時になつて「なせ私は修道者になつたのでせう。なせ善く天主様に事へたのでせう」と、口惜しがるものは一人でもあるまい。却てそんな身分にして戴いたのを何よりの聖恩と感謝し、極く満足して一生を送り、極く満足して此世を立つに相違ないのである。聖ベルナルドの兄弟のゼラルドは、自分は主の御家で死ぬのだと思つて、嬉しさの餘りに歌ひながら死んだ。イエズス會のストアレス靈父も、修道院で氣息を引取るよと思つては、言ひ知れぬ喜び、慰安を

覺おぼわ、「死ぬしぬのが斯かうまで樂たのしいとは思おもはなかつたよ」と曰いつた。同會どうかいの或ある修しう道だう者しゃは、最さい期ごの間ま近ぢかになつたのを見みて、喜よろこびに堪たへずして莞にら爾こと微ほ笑ゑんだ。「斯この場合はあひに何なんで微ほ笑ゑむのですか」と問とはれて、「ハイ何なうして嬉うれしからずに居ゐられますか、イエズス様さまは何なんと御お約やく束そくなさいました？御ご自じ分ぶんに對たいして、家いへを棄そて、兄きやう弟たいを棄そて、父ちち母ははを棄すてたものは、百ひゃく倍ばいの報ほう賞しやうを賜たまはり、終をはりなき生い命ちやうまでも得ねられると仰おつしやつたぢやありませんか。私わたしは天てん主しゆ様さまの爲ために何なにも箇かも棄そてました。天てん主しゆ様さまは信しん實じつにして約やく束そくを違たがへなされることはありません。天てん國こくは確たしかに私わたしの有ものです。何なうして喜よろこばずに居ゐられますか、微ほ笑ゑまずに居ゐられますか」と答こたへた。

又またサルネリと云いふ靈れい父ふは、死しぬ少せうし前まへに天てんを仰あいで、「天てん主しゆ様さま、私わたしが

二ひ口くちの物ものを言いふにも、少ちよつとの行おこなひをするにも、すべて主しゆの光み榮さかを目的あてとして居ゐたことは御ご存ぞんじの所ところでありませう。今いま御お思し召めしにより、面まりの聖み顔かほを仰あみ視みする時ときが近ちかくなりました。私わたしは夫つまれを待まちち詫わびて居ゐます」と、斯かう祈いのつてから「サア、樂たのしい最さい期ごに取りかゝりませう」と曰いつて、主しゆと物もの語ごを始はじめ、唇くちびるには涼さやしい笑あみを浮うかべながら眠ねむが如ごとく息いき絶たわられた。して其その屍かばねは芳かほはしき香かほを放はなち、五ご六りく日にちの間あひだと云いふものは室む一杯はい、得ねも言いはれぬ芳かほ香かうがしたと云いふことである。

されば聖せいベルナルドベルナルドが修しゆ道だう者しゃの身み分ぶんを讚ほめて、「何なんの恐おそ怖おそもなく死しを埃まち設まうけ、愉ゆ快くわいに之これを望のぞみ、信しん心しんを以もつて之これを接あうけること出で來きる修しゆ道だう者しゃの身みの上うへこそ幸さい福ふくである」と叫まげられたのも、決けつして溢あ美みた言ことばではない。

祈いの 禱たう

主よ、私に善き終焉を遂げしめんとして、御自分には非常に痛ましい御死去を遂げ給うた主イエズスよ、主は多くの人に超えて私を愛し給ひ、私に御足の跡を歩かせ、慈愛深き御胸に私を抱き締めようと思召し給うたのである。伏して願くは私を主に結び附けて、心地よい愛の鎖もて私を固く結び附けて、何時迄もく離れること出来なくし給へ。あゝ最愛のイエズスよ、私は斯う云ふ大恩を忝うした上は、如何にかして之に應へ、聖意を喜ばせ申したいものと一心に望み奉る。然し私は性來至つて虚弱ものであれば、何時心變がして、却て恩に報ゆるに仇を以てすることになりはしまいか、心配で心配で堪らない、主よ、あゝ主イエズスよ、決してさる禍に遇はしめ給ふな、斯う云ふ難有い御愛情を忘れて再び主に背かんよりは、寧ろ今ま潔く御前に死なし

め給へ。

主よ、私は主を愛し奉る。主は私の心の王、私の靈魂の無二の御主にて在せば、私は萬事を抛つて、たゞ主を唯一の寶と崇め尊び、世間の事物とは一切手を斷つて、専ら主を愛し奉る。私の生命は主を愛するがためにのみ使ひたい。残んの歲月は長からうと短かゝらうと、残らず之を主に献げて、一心と主を愛し奉る。私は主を抱き締めたまゝ、しかと我が胸に抱き締めたまゝ死にたい。私は唯だ此の恩恵を願ひ奉る。此他には一つとして願ひたいものはない。何とぞ私が何時も、主の愛熱に燃わ立つ様、臨終に際しては『主よ、愛し奉る、主よ愛し奉る』と繰り返しつゝ、永き眠に就くことが出来る様、聖寵を恵み給へ。

あゝ汚なき童貞聖マリアよ、私の爲に此の聖恩を請ひ求め給へ。ア
メン。

三、主の御招に應はなかつた人は、何んな恐るべき
審判を受けねばならぬか。

『修道者になれ』との御招は並大抵の聖寵ではない。聖書にも『總て
の國民には斯く成し給はざりき』(詩一四七)とあるが如く、極めて稀に
極めて少數の人にしか與へられない特別の聖恩である。主の御家に住
んで、其近侍となり、完全な生活を爲すべく召されるのは、大國の王
に取立られるよりも、幾倍と優れて難有い聖恩ではあるまいか。此世
の限りある國と、天の窮りなき御國とは、てんで比較にならないこと
を思つたら、この聖恩の難有い譯も察せられるであらう。

然るに與へられる聖寵が大ければ大いだけ、之に應はない日になる
と、主の御怒が怖ろしい。審判の曉には其の御訊問も嚴しいに違ひ
ない。それも其筈で、國王が賤しい農夫を御殿に召し上げて、高い
官職に就けてやらうと思召されるのに、その農夫が何うして
も自分の汚い茅屋だの、葺樓だのを離れさらずに、さう云ふ大恩を謝
絶りすると云ふならば、國王の御立腹は如何ばかりであらうか。

主は聖寵の價値を充分に知つて居なさるから、我等が其の難有い聖
寵を等閑にして顧みもしないのを見給うては、何しても其儘に棄て置
き給ふ譯には行かぬ。況んや主は無上の主君に在せば、一たび口を開
いて『斯うせよ』と命じ給うた上は、直と従はれたく思召し給ふのであ
る。されば何人にしても主の特別の聖寵を賜はり、完全な生活に招かれ

ながら、之に應はなかつたら、主の方でも以後は必要な御光を恵み給はず、全く暗黒の中に打棄て置き給ふに相違ない。然うなつたら詰る所、二つと掛換のない靈魂までも失つて、地獄の終なき苦罰を申渡される破目に陥らんとも限らない、寒心るべき事ではあるまいか。

然らば修道院に招かれるの幸福を得たものは、一方ならぬ聖寵を蒙つたのであるから、厚く主に感謝せねばならぬが、然し此聖寵に應はなかつたら、幾ら慄れてもく足りないのである。主が我等を御側近くお招き下さるのは、我等の救靈を一心と望み給ふからである。然し此の救靈は、御自分が選んで我等に御示し下さつた完徳の道に由りてこそ求むべきもので、もし我等自身が勝手に擇んだ道を踏んで之を得ようとするならば、ナカク嶮呑である。主が『修道者になれ』と御招

き下さるのに、それには従はずして、世間に踏み止るならば、折角與へられる筈になつて居る効力ある幫助までが取上げられるかも料られない。幫助が無くなつては救靈の出来よう筈がない。『我羊は我聲を聴く』(ヨハネ二)と主は曰うた。されば主の御聲に耳を塞ぐ所のものは、主の羊ではない。公審判の曉に、誅罰の宣告を受くべき山羊の仲間だと云ふ證據であらう。

祈禱

あゝ主イエズスよ、主は測り知られぬ御慈愛を以て、私を多くの人中より選んで、主の特に愛し給ふ僕婢等の中に加へ、御家に住居するの幸福までも與へ給うた。私はこの聖寵の極めて價高く、私見たやうな賤しいものが、到底之を忝うするに堪へないと云ふことは充分

に辨へて深く感謝し、是非ともこの御慈愛に應へ、飛び立つて御命令に従ひたい決心である。私から進んで御捜し申さうともせず、却て色々と罪を犯して、聖恩に背いて居たにも拘らず、主は私を打棄て下さらず、あべこべに情を掛けて御側へ招寄せて下さつた。それに何うして二度と斯の大便を忘れ、主を打棄て申すやうな憎むべき忘恩の罪に陥られよう。主は私を愛して、御血も御生命も抛つて下さつたのに、今更ら主を振棄て、世間に愛着されるであらうか、是まで幾度となく主の聖寵を失はせ、私の救靈を危くした彼の憎むべき世間に愛着されるであらうか。

あゝ主よ、主は妙なる御慈愛を以て、私を御招き下さつた上は、御聲に従ふ力をも恵み給へ。私は夙くから、「主に従ひまする」と約束し

て居るが、今日は再び此約束を新にし奉る。然し聖寵の補助なきに於ては、逆も終まで之を守り通すこと出来なければ、今一心と其聖寵を願ひ奉る。主の御功德によつて伏して願ひ奉る。悪魔は始終私の情慾を煽り立て、主に背かせようと努めて止まないから、之を抑制へるだけの勇氣をも恵み給へ。主よ、私は主を愛し、一身を擧げて全く御手に献げ奉る。私はもう主の有である。何時までも主の者とならしめ給へ。

私の御母にして、又た信頼なる聖マリアよ、御身は『永續の母』と稱へられ、御傳達に由れば、容易に終を全うすること出来るのである。何ぞぞ私の爲に傳達ぎ給へ。私は一心と御憐に縋り奉る。

四、主の御招に應はない人の蒙るべき地獄の苦罰。

自分の過失ゆるに何か貴重な寶物でも失ふか、大きな損害でも招くかした時は、何人しも堪へ難い思がするものである。況して主の特別の御恩を蒙り、修道者となるべく招かれたものが、それに應はなかつた爲に、地獄へ投込まれることにでもなつたら、如何に口惜しく思ふであらうか。あ、私は何と云ふ馬鹿なものであつた。主の御聲にさへ應うて居つたら、聖人ともなり、天の窮りなき福樂を享けることも出來たのに、今は却てこの恐ろしい苦罰の中に逐謫され、何時迄も、此處に繋がれねばならぬ悲さよ」と、血の涙を飲んで悔しがらうであらう。

○ 惘然なる彼は、其時やつと迷妄の夢を醒まして、遠い／＼公審判の曉の光景を想見るに相違ない。主の御招に従つて世間を振捨てた熱心な修道者等が、救主の右に据ゑられ、頭に玉の冠を輝かして、聖

者と崇められるのに引換へ、同じ御招を忝うした自分は、主の御聲に耳を塞いだばかりで、聖者の勸を逐拂はれ、悪人の仲間に入込まれる悲しい場合をまざ／＼と想ひ浮べて悔さ遣る瀬なく、地獄の上に又た大きな地獄でも重なるかの様に覺るであらう。

さて／＼雲攫むやうな幻影を追ひ廻はして、折角の御招に背き、終には地獄の窮なき禍殃の中に跳り込むに至ると云ふは、如何にも馬鹿／＼しいことではあるまいか。今我等は主の御家に隠れて、善を修め徳を積むべく召されて居るのであるが、萬一この難有い聖寵を無駄にするやうなことでもあつたら、如何なる危険に陥るべきであるか。篤と考へて見ねばならぬ。此聖寵こそが、我等を衆人の中より拔擢んで、天の侯伯の仲間入をさせようと云ふ難有い主の御意の上から與へ

られるのであるが、若し我等が之に従はずして、地獄へ墮落すること
にでもなつたら、堪へ難い苦罰の基ともなるのだと云ふことを忘れて
はならぬ。今ま主は、右するか左するか我等の隨意に托して下さるか
ら、天國に昇つて大王となるか、地獄の底へ落ち込んで他の人にも優
つて苦しめられるか、二つに一つを擇まねばならぬ。今は實に其時で
ある。

祈 禱

否、主よ、私は主の御聲に背いて不忠の僕婢となつてはならぬ。私
は御慈悲の程を認めて居る。主が數ならぬ私に御顔を背け給はず、幾
度となく地獄へ投込まれる等々なつても投込み給はずして、却て完徳
の途へ引入れ、天の御國には私の爲に一際美はしき玉座までも備へて

下さる御親切は充分に辨へて居る。斯う云ふ聖寵こそが容易に何人に
でもは與へられぬのであれば、もし私が之に應はないとあつては、人
にも倍して嚴しい罰に遭はさるべきものと覺悟せねばならぬ。否、主
よ、私は應ひ奉る。私はもう全く主の所有である。何時迄も主
の所有である。私は修道者となつた上は、如何なに辛い事でも喜んで
遣つて除ける決心である。幾ら不愉快な、苦しい目に遭はれるとして
も、私の蒙るべきであつた地獄の終りなき苦罰に比べたら、物の數で
もあるであらうか。

主よ、私は罪に罪を重ねた大悪人で、疾くに地獄の底に罰さるべき
ものであつたが、然し今は身も心も残らず御手に献げ奉る。何とぞ
御意の儘に取計ひ給へ。私の罪惡を見咎め給はず、却て御憐れを垂れ

て一心と主に仕へしめ、生きても死んでも主を深く愛さしめ給へ。あ
 り限りなく愛すべき主よ、私が地獄へ落ちて、主を憎み申すべきであ
 った丈けなりと主を愛さしめ給へ。主は私の繋がれて居た世間の綱を
 切斷り、恐ろしい悪魔の手より救ひ出して下さつたのに私は、何うして
 一心と主を愛せずに居られよう。否、私は愛し奉る、愛し奉るからし
 て、何時迄も主に仕へ奉る。何時までも喜んで主に従ひ奉る。
 私の代願者なる聖母マリアよ、斯る難有い御憐れを忝うしたのは、
 全く聖母の御蔭であれば、私は深く感謝し奉る。私を扶け給へ。斯
 くまで私を愛して下さる主に對して忘恩者とならしめ給ふな。御恩に
 背かんよりは、寧ろ潔く御前に死するの聖寵を乞求め給へ。アメン。

五、天國に於て修道者に與へられる無量の光榮。

修道院から天國指して登る道は極めて平坦で、修道院で死ぬ者が地
 獄へ落ちると云ふは千に一つもない。地獄へ落ちるやうなものならば、
 とても終りまで修道院に踏み止る筈がない。されば修道院は天國の門
 であつて、修道生活を爲續けて居る人は、確に天國へ入るべく選ばれ
 た者と云ふ徴候などは、聖人等の御説である。
 其上、天國の褒賞は謂ゆる『正義の冠』で、よしんば我等の功績にズツ
 と遙に超れたものであるにもせよ、『人毎に其行に従ひて報ゆべし』
 (マテオ十)と云ふ聖言を以て見れば、やはり各自の德行に釣合を取つて
 あるに違ひない。然らば毎日、澤山の功績を立てること出来る熱心
 な修道者は、如何に大きな褒賞が戴けるであらうか。試に思へ、修道者
 は現世の財寶を残らず主に献げ、身には何一つ有たないで全く清貧に

安じて居る、家族を捨て、朋友に別れ、生里にも離れて、専ら主に奉仕へて居る、而かも世間に在る時とは違つて、何に付け彼に付け始終不自由を耐へ忍び、苦行を力めて居る。終に修道者は一身を擧げて主に献げる、従順の願でも立てると、己が意志までも犠牲として全く主に献げるのである。

人が所有つて居る物の中で、一番價値のあるのは各自の意志で、主が何はさて措き人に要求め給ふのも斯意志である。「我子よ、汝の心を我に與へよ」(箴言二三)と仰せられたのは、「斯意志を献げよ」と云ふ意味に外ならぬのである。世間に在りて一心と主に仕へ奉る人も、自分の所有つて居るものを快く献げるが、我身は献げない。或る一部分を献げるが、全部を献げると云ふ譯ではない。即ち慈善業を以ては己

が財産を献げ、斷食を以ては己が養料を献げ、苦行を以ては身の快樂を献げる、然しながら斷食したい時に斷食し、祈禱したい時に祈禱すると云ふ捕梅に、己が意志は矢張り遺して居る。之に反して修道者は自分の意志を献げて居るから、我身を残らず献げたのも同様で、之を譬へると、ただ樹の實を献げるのみならず、樹其物までも一切残らず献げて居るやうなものである。随つて彼等は主に向つて、「私は意志までも献げました上は、もう何一つ献ぐべきものは有ちません」と臆する色なく申上げることが出来るのである。

斯の如く修道者は萬事従順によつて動いて行くからして、何時でも主の聖旨を完全に行つて、大なる功績を積むことが出来る、嘗に祈禱や斷食や其他の苦行やを勤める時ばかりではなく、食べるにも寝るにも、

掃除するにも労働くにも、休息む時すら遊戯ぶ時すら、自分の望に從はず、規律によつて動いて行くので、萬事に主の聖意を遂行ふ譯になる。されば聖人等が『何事でも從順に由つて行ふ時は、立派な祈禱である』とかの、『從順を好む修道者の行動は皆な功力ある業である』とかの曰はれたのは過言ではない。殊に聖アロイジオの如きは、修道者の生活を順風に帆を孕まして居る船に譬へて、『櫓を動かさぬでも船はずん／＼前へ進む』と曰つた位である。

あゝ實に修道者が一ヶ月の間、善く修道院の規律を守つて立てる功力は、世間にある人が一ヶ月の間も、身を苦め熱心に祈りて獲る所にも遙に優ることがあるのである。聖ドロテオの弟子のドジテオは、規律の下に生活したことは僅に五ヶ年に過ぎなかつたが、さて天に於て

戴いた褒賞と來ては、彼の幾十年の久しい間、野山に引籠りて苦行された初めの隱遁者聖パウロや、修院長聖アントニオの夫れにも、をさ／＼劣らなかつたと云ふ主の啓示が師のドロテオにあつたと云ふ。誠に修道者が嚴格な規律の下に、窮屈な月日を送つて行くのは随分と辛い。謂はゞ農夫が春の野に汗水滴らして種子を蒔くやうなもので、『往き往いて泣いて種子をば下しけり』(詩一二二)と云ふ聖書の文句をの儘である。然し澤山の功績を背負つて天國指して登り行く時は、正しく農夫が充分の稻穂を荷ひ、喜び勇んで我家に歸るやうなもので、『來て來ては禾束を背負ひて躍り喜ばん』(同)と云ふ聖言が自と思ひ浮べられる。其時こそ彼等は喜悅の情に堪へずして、『準繩(家督を分け)は我が爲に樂しき地に落ちたり、宜哉、我れ善き嗣を得たる哉』(詩一五)

と歌ひ出すのである。實に主の特別の御寵愛を蒙りて、修道者の難有い身分に召され、天國の得も云はれぬ褒賞を戴くことになつたよと思つたら、何うして感泣、鳴謝せず居られよう。

祈 禱

あゝ主よ、主は斯くまで私の幸福を望み、斯くまで私に愛されたいと思召し給ふのに、何うして私は主を愛し申さうとも、聖意を喜ばせ申さうともしないのであらう。然し主は何の御目的あつて、斯程の大神を私に施し、態々世間の危い中から私を引取り下さつたのであらう。主が斯まで私を愛して下さるのは、つまり私からも熱く愛されたい、此世でも、後の世でも私を全く主の有になしたいと云ふ思召からではあるまいか。私に世間の事物を一切振り棄てさせ、唯一の寶にして、た

ゞ獨り愛すべく、唯だ獨り限りもなく愛すべき主を一心と愛させたい思召からではあるまいか。あゝ私の寶、私の愛、私の萬なるイエズスよ、私は唯だ主に向つて憧憬がれ、たゞ主を愛し、たゞ主獨りを愛したいと望み奉る。斯う云ふ難有い望の火を私の心に燃やして下さつたのは感謝に堪へない所である。たゞ願くは何時までも此望を失はしめず、却て益々熾んに其の火の手を上げしめ給へ。現世に於ては何時もく主を愛し、聖意を喜ばせ申し、天に昇つては主の喜ばしい御顔を面りに仰ぎ視て、一心と愛し申すの幸福を惠み給へ。私の願望は唯だ是ればかりである。主よ、私は主を愛し奉る。心の底より愛し奉る。愛し奉るよりして、如何なる痛苦でも甘んじて耐へ忍び奉る。あゝ最愛のイエズスよ、私が善を修め徳を積みて聖人にもなりたいと望

むのは、決して天國に登つて澤山の福樂を享けたいからではない。たゞ大に聖心を喜ばせ申したい、唯だ千代に八千代に主を愛し申したいと云ふ一念からである。永遠の御父よ、御子イエズスに對して私の願を聽容れ給へ。

私の御母なる聖マリアよ、如何なる恩寵でも御手を経て與へられるのであれば、何ぞぞ御憐れを垂れて私を幫助け給へ。アメン。

六、熱心な修道者の賜はる心の平安。

主は御自分の爲に、其の懐かしい父母を捨て、其の可愛い兄弟姉妹を捨て、其の大切な財寶までも打捨てたものには、此世に於ても百倍の報酬を與へ、後の世では終なき生命を賜ふと約束し給うた。(マテオ一) 信實にして約束を違へさせ給ふことなき主にて在せば、その約束には

寸分の間違でもあらう筈はないのである。

『心の平安』と云ふものは、現世の萬ての邦國にも超ねた珍寶で、たとへば全世界を掌に握ることが出来るにしても、心に『平安』がないならば、何の愉快もあるものではない。世界の大王となつても、心に『平安』を失つて、始終憂ひ悶て居る位ならば、寧ろ貧しい生活はしても、満足で、安心で、日を送つて居る農夫の方が餘つほど幸福である。

然るに此の貴重な『平安』の寶を與へるものは誰であらう。世間であらうか、と云ふに決して然うではない。聖會が其祈禱の中に、『主よ、世間の與ふる能はざる彼の平安を主の僕に與へ給へ』と誦へるが如く、『平安』は『すべての慰安の神』と仰がれ給ふ主の外には、誰とて與へること出来ない寶である。『平安』を與へるのは唯だ主のみであるが、さて

主はこの得難い寶を誰に與へ給ふであらうか。ごうで萬事を抛棄て、總ての物に離れて、只管御自分を愛する所の熱心な修道者に與へて下さるに相違あるまい。であるから熱心な修道者は、たとへ身は物寂しい修道院に引籠り、貧乏もし、輕じられもし、苦行、制慾に疲れ果てもしようが、然し有ゆる榮華、快樂に酔つて居る帝王よりも幾ら満足で、安心で月日を送るか知れないのである。

あゝ、實に熱心な修道者の味つて居る『平安』の如何に楽しいものたるかを世の人が知つたならば、世界は全く一の修道院になつて了ふであらう。左なくとも修道院の壁に梯子を投げ掛け、ひし／＼と詰めて来て、『修道者になして下さい、修道者になして下さい』と迫るに相違ない。

一體人の心は限りなき寶を欲しがらるやうに造られたものであるから、此世の事物を悉く手に入れたとて、畢竟限りある、朽ち易い寶である以上は、斯心の欲求を満足させ得るものではない。唯だ主のみが限りなき寶に在して、この主を我物となしてこそ始めて心は満ち望は飽いて充分に樂を覺るのである。故に聖書にも録されてある。

『汝、主に於て樂め、然る時は汝の心の願望を與へ給はん』と(詩篇三)されば主と一致して居る修道者は、たとへ世の帝王が權勢を擅にし、富貴を極め、榮華に傲つて居るのを見ても、露ばかりも其身を羨むことなく、却て聖パウリの如く『金満家は其富を寶とせよ、帝王は其爵位を誇とせよ。私の爲にはキリスト様こそ何よりの爵位である、何よりの榮譽である』と曰ふのである。

實に熱心な修道者は、世の人が富や位や奢侈やを鼻にかけて、矢鱈に威張り散らすのを見ても、自分ばかりは益々世間の事物に遠かつて主に近接き、固く之と一致して、云ひ知れぬ平安、満足を感ぜ、喜びに堪へずして『彼等は車を頼み、此等は馬を頼む、されど我等は主なる神の御名を誦へ奉る』(詩篇一)と歌ふのである。

聖女テレジアの説によれば『天國の幸福の一滴は、遙に世間の有ゆる快樂に勝る』と云ふのである。ローレンのカロ、靈父と云ふは、ローレン公爵の一族でありながら、爵位も財産も打棄て修道者と爲つた人であるが、嘗て人に語つて『修道院に於て天主様が私に味はして下さつた一瞬間の歡喜は、優に私が抛棄てた總ての物を償うて餘あるほどです』とまで曰はれた。實際その喜悅は餘つほど大したものであつ

たらしく、師は獨で自分の房に居る時は、餘りの嬉しさに覺えず小躍りされる程であつたと云ふ話である。又たカプシン會の福者セラヒンと云ふ修道者は、自分の締めて居る繩帶の一寸を全世界の邦國とでも換へはしないと曰うて居られた。

嗚呼實にアンジオの聖フランシスコの如く、主の爲に萬事を抛つて『あゝ我神よ、我萬よ』と叫ぶほどの修道者は、如何に幸福であらうか。世間の奴隷の綱より解放され、その良からぬ情愛を振り切つて、一身を主に獻げて了つた時の心持は如何であらう。それこそ熱心な修道者に與へられる謂ゆる『神の子の自由』なので、世の人の到底味ふこと出来ない愉快である。尤も初の程こそ世間の交際や遊興やに遠かつて、嚴肅な修道院の規律を守るのは、荆棘でも踏むやうな心持がす

るかも知れぬ。然し主を愛するの眞情を以てちつと之を踏み附けると、案ずるより産むが易いもので、何んでもないのみならず、此の恐ろしい荆棘が後では香ばしき花となり、天國に於て味はれるやうな床しい快樂ともなるであらう。然うなつたら『神の平安はすべて思ふ所に過ぎたり』(四ノ七)と聖パウロの曰はれた如く、世間の祝宴や遊興やに因つて味はれる凡百の快樂にも遙かに超れた、言ふにも言はれぬ『平安』を樂むことが出来る。實に、自分は天主様の聖意に適つて居るよ、と悟つた時ほど大きな愉快は、とても此世では味はれないのである。

祈禱

あゝ主よ、主は私の愛、萬に在して、此世でも後世でも、私を幸福ならしめ得るものは只だ主獨である。然し私が主を愛し申すのは、

敢へて我身獨の快樂を求めらるが爲めではなく、たゞ聖意を満足させ申したいと云ふ一念からである。實に一生の間、如何なる痛苦の中にあつても、主の聖意に我意を適はせ申すこと出来るのは、私の爲に何よりの願望で、又た何よりの幸福である。

主は無上の君、唯一の神、私を限りなく愛し給ふ最愛の神に在して、私は主に造られたものであれば、聖意を喜ばせ申すより外に將た何をか望み、何をか冀ひ申すべき。あゝ主は私を愛して、天の玉座より此の果敢ない屋の世に降り、私の爲に貧しい苦しい月日を送られた。私も是からは萬事を振り棄て、唯だ主を愛するが爲にのみ生存へたい。たゞ主の聖意を喜ばせ申すのを唯一の樂としたいものである。最愛のイエズスよ、私は主を愛し奉る。力の限り愛し奉る。主を愛さし

てさへ下されば、其他は御意の儘に如何様にも取計らひ給へ。

天主の御母聖マリアよ、私を護り扶けて、ますく御身に似寄らしめ給へ。御身に似寄らしめ給へと申しても、御身の如き光榮を享けたいと願ふのではない。唯だ御身の如く、主の御意に適ひ、主の聖旨を遂行し申す聖寵を得たいと望むだけであるあ、聖母よ、何ぞ私の爲にこの聖寵を乞求め給へ。アメン

七、冷淡な修道者の危険いこと。

冷淡な修道者の惘然な状態を想へ、己が生里を離れ、父母の家を捨て、世間と世間のあらゆる快樂を抛ち、己が意志までも自由までもすべて犠牲にして、一身を残らず主に献げて了つて居ながら、冷淡に陥り、怠慢者となり果て、終には地獄にも罰される危険に身を投げ込む

馬鹿くしさを想ひ見よ。主の御家に召し入れられて修道者となつたのは、善を修め徳を研いて、聖人ともなるが爲であるのに、冷淡に流れ、不熱心に墮落つては、救靈さへも覺束ない、もう一足で永遠の滅亡であらう。主が冷淡な者に向つて『汝は冷かにも熱くも非ずして温きが故に、我は汝を口より吐き出さん』(黙示三)と曰うて、速に心を悔めなければ、御自分の口から吐き出して、全く打棄て願ひもしないぞよと威嚇して居られる所を思へば、そんな人は如何ほど大きな危険に差しかつて居るか、察せられるであらう。

聖イグナシオは、イエズス會員の一人が次第く冷淡に流れ行くのを見て、一日之を膝下に招き、『御身は何の爲に修道院に來ました』と尋ねた。すると其會員が『天主様に事へる爲にです』と答へたから、聖

人は、「なに天主様に事へる爲に？もしカルヂナルに事へる爲に、此世の帝王に事へる爲にと云ふのなら、是れでも申譯が立つでせう。然し御身は天主様に事へる爲に來ましたと仰しやるが、是れは天主様に事へる道ですか」と曰つて、丁寧ていねいにその不心得ふこころねを諭しされたそうである。實に修道者が主に召されたのは、聖人となつて救靈を働くが爲である。それに聖人となるやうには努めないで、何時も冷淡で、不足勝ちな暮し方をしながら救靈を得ようと思つては大に的が外れる。『天主様は常に怠慢者を棄て給ふ』と聖アウグスチノは曰つた。ごんな風に棄て給ふかと云ふに、小さな不足過失を、氣が附いても、忠告を受けても構はずに放つて置くと、次第に大きな不足過失に迂り落ちて、終には主の聖寵まで、修道生活の御招まで失ふに至つても、主の方では素

知らぬ顔して顧みても下さらぬやうになるのである。

聖女テレジアが嘗て世間的情愛の綱に繋がれて居たことがあつた。

それは別段罪になるやうな情愛でもなかつただけれども、『その綱を振り切らなければ、地獄の中だぞ』と主は戒め給ひ、地獄に備へ付けてある場所までも御示しなされた。實に『小事を輕ずるものは次第に倒れん』(會衆書一)とあるが如く、小罪だからと高を括つて、平氣で犯し續けて居ると、何時の間にか重大な過失に陥らんとも限らないのである。修道者の中には主の御後に跟いて行きたいとは思ひながら、聖ペトロの如くに、遠くかけ離れて歩かうとするものが多いが、そんな心掛では亦た聖ペトロの如く、三たびでも四たびでも主を否んだり、棄たりするに至るのは不思議ではあるまい。

冷淡な修道者は、主の爲に何か僅かな事でも爲れば、それで澤山だと思つて居るのであるが、然し主が折角之を修道院に召し入れ給うたのは、完徳を修めさして立派な修道者となすの御意からであつたから、到底僅かな事では満足し給はぬ。満足し給はぬばかりか、然う云ふ忘恩の所爲を甚く憎み給ひ、特別の聖恩などは與へて下さらぬ。時によつては墮落の淵へ落ちこんで了ふ迄も、高處から見物して打棄て置き給ふことさへある。されば聖アウグスチノは『是で充分だと安心したら、もう滅亡したのであるぞ』とまで言つた位である。

主イエズスが無花果の樹を咀ひ給うたのは、悪い實を結んだからではない。たゞ葉ばかり繁らして實を結ばなかつたからである。修道者も夫れと同じで、たゞ修道者の服を着けて居るだけで、身に修道者の行

がないならば、咀はれて地獄の火に投げ込まれるに相違ない。ルイ、ツボン靈父は曰つた『私は多くの過失に陥つたけれども、一度でも過失と和睦はしなかつた』と。完徳を修むべく召された修道者でありながら、自分の過失と和睦する人は、禍なるかな。不足、過失を厭に思つて居る間こそ未だ進歩の見込があるが、罪を犯しても過失に陥つても、些しも氣に掛けなくなつた時は、もう夫れ迄である。到底聖徳に達する望はない。『少く蒔く人は亦た少く收穫れん』(コリント後)と聖パウロは曰つた。自分の蒔いた種子の多き寡きに應つて、收穫も夫れく多し寡くあるのである。然るに聖人となるが爲には普通の聖寵では足りない。是非とも特別の聖寵が必要である。然しながら主の聖愛を求めるに骨を惜んで、ぬらりくらりと働いて居る人に、何うして然んな

得難い聖寵が惠まれる筈があらうか。

加之、聖徳の域に達するには、有ゆる障碍を打破つて、屈せず撓まず進まなければならぬ。何人にしても他人に抜でて徳の道を馳るはごしの勇氣がなくては、完全な人となれるものではない。されば修道者たる者は、豫ねく『自分は何の爲に世間を棄てた。何の爲に世間の有ゆる事物を棄てて修道者となつた。たゞ身を修め徳を研いて聖人となるが爲めではないか。それにこんな冷淡極まる、不足だらけの暮し方をしては、何うして聖人となることが出来ようぞ』と思ひ、我と我身を戒めねばならぬ。聖女テレジアはその部下の童貞等を勵まして、『御身等は今もう一番六ヶ敷い分は仕遂げたのです。残る所は僅少な、易いことばかりですよ』と曰うて居られた。實際然うである。己が生里を

去り、懐かしい父母兄弟を振棄て、財産も、快樂も残らず抛つたのは最も難い所を成し果てたので、残る分は極く易い事ばかりであるから、今ま熱心に之に従事ねばならぬ。

祈 禱

主よ、罪に應つて私を拒け給ふな。私は必と悔める、きつと行を立て直す決心である。今迄は實に怠惰勝ちで、主を満足させ申すこと出来なかつた。主がわざ／＼與へようと用意して居なさる聖寵までも、私の冷淡を以て、其流口を塞ぎ參らしたのである。主よ、願くは私を振棄て給はず、御慈愛を垂れ給へ。私は此の惘然な境遇から抜け出ねばならぬ。今よりは務めて情慾を制止へ、御勧誘に従ひ、我務を怠ることなく、熱心に之を果す決心である。要するに是れからと云ふもの

は、力の限りを盡して御意を喜ばせ申し、御旨に適ふことゝ分かつた上は、何一つ怠りはしまいと決心して居るのである。

あゝ主イエズスよ、主は数々の聖寵を惜気もなく與へて下さつた。私の爲には御血でも御生命でも抛棄て下さつたのに、私は何うしてそれを一心と感謝しようともせぬのであらう。主は有ゆる尊敬を受け給ふべく、有ゆる愛情を傾けて愛され給ふべく、主の爲には如何なる辛苦でも、骨折でも厭うてはならぬのである。然れども私は至つて弱いもので、御援に由らなければ主を愛することも、愛したい望を起すことも能はざれば、何とぞ全能の御腕を伸ばして私を扶け、一心と主を愛するを得せしめ給へ。

元罪の汚なき童貞、慈愛深き御母マリアよ、御身は私を扶けて世間

を離れしめ給ひたれば、何とぞ亦た私を扶けて、我身に克ち、完全な修道者となるに至らしめ給へ。アメン。

八、一身を擧げて主に献げざれば、その御寵愛を

蒙ることは出来ない。

『我を愛するものは、我も亦た之を愛す』(箴言八)と云ふ聖言の如く、主を愛すれば主にも愛される。然るに一身を擧げて主に献げたとは云ふものゝ、未だ幾分かは世間の事物に心を残して、全くは主の有となりきれない人が寡からずある。それでは逆も主の御愛を辱うすること出来よう筈がない。愛情を二分にして主をも愛しよう、世間にも離れまいとするやうな人が、何うして主の御寵愛を蒙られるであらう。主に對して愛情を惜めば、主の方でも矢張り御愛情を惜み給ふに違ひ

ない。之に反して一旦、主以外の事物、主を愛するに妨となるものを残らず心から驅り出して、身も心も全く主に献げて、『あゝ我神よ、我萬よ』と申すやうになると、主も喜んで御自分を残らず之に與へ給ふのである。

聖女テレジアの如きも、主の外に或る朋友を愛して居る間は、實に不足勝の女であつたが、一たび一切の關係を斷つて、我身を残らず主の愛に献げるや、親しく主の御口より『今より汝は全く我がもの、我も亦た全く汝のもの』と云ふ難有い聖言を頂戴することが出来た。

抑も主イエズスは、我等を愛するの餘り、この果敢ない涙の谷に天降り、一身を擧げて我等に與へ給うた。イザヤ豫言者が『嬰兒、我等の爲に生れたり、一人の子供我等に與へられたり』(イザヤ)と曰つた如く、主

は我等を愛して、己を全く犠牲に供へ給うたのである。主が己を全く付し給うたとすれば我等も亦た此身を全く主に献げて、始終主の愛熱に燃わ立ちつ、『私は何時も主の有となりたい。主は私に御自分を全く與へ給うた。私も同じく此身を擧げて主に献げ奉る』と申上ねばならぬのである。

聖女テレジアが死後、一修道女に顯はれて、『天主様は、冷淡で不足勝なる千人よりも、御自分に堅く一致して、身も心も残らず献げて居る一人をば一層深く愛し給ふ』と告げたが、實に斯る人こそ、天に昇つてはセラヒン天使の組に置かれるのであらう。『我が鴿、我が完全きものは唯だ一人のみ』(雅歌六)と云ふ聖書の句を以ても、主が完徳に志して奮發する靈魂を愛し、他の多の人の中にも、取分け其人を愛

し給ふと云ふことが察せられる。

某の福者は『獨に獨を』と曰うて居たさうであるが、『獨に獨を』とは、我等の有つて居る唯だ一つの靈魂をば、残りなく惜げなく主獨に献げねばならぬ、たゞ獨り愛すべく、たゞ獨り世のすべての物に超えて我等を愛し給ひ、たゞ獨り我等を眞に幸福ならしめ得給ふ主に献げねばならぬと云ふ意味である。『汝、萬を棄てよ、然らば萬を見出さん』(キリストの摸範)。(三篇の三二章) 我等もし主の爲に一切の物を抛棄てたならば、必と主の中に一切の物を見出すことが出来る。されば我等は今より身獨になつて、世の物には總て暇乞ひをし、たゞ獨り限りなく愛され給ふべく、又た是非とも愛せねばならぬ主の有となるやう努めたいものである。

祈 禱

『我が愛するもの我に在り、我も亦た彼に在るなり』(雅歌二、あゝ、主よ、主は御身を残らず私に與へ給うたのに、私もし一身を擧げて主に献げ申さなければ、『餘りの忘恩者よ』と譏られても致方ないのである。私が全く主のものとなるのは主の御望であれば、私は今ま此身を残らず御手に献げ奉る。何とぞ御憐れを垂れて、私の奉獻を嘉納め給へ、私の心も今迄こそ、世間の果敢ない事物に愛着して居たが、然し是からは一途に主の限りなき美善を慕ひ、聖女テレシアと共に申上げ奉る。『今よりは此の私が死んで、私の内には主獨り生き給へ。私の内に生きて私に生命を與へ給へ。私の上に王たり給はゞ、私は甘んじて主の奴隷となるであります。私は他に自由なぞ望みはしません』と。

あゝ主よ、愛すべき主よ、私の心は餘りに狭隘い、限りもなく愛すべき主を愛し奉るには餘りに小さい。それに何うして此の狭隘い、小さい心を分けて、主の外に何物かを愛しようとはするのであらう。私は主を愛し奉る。萬事に超えて愛し奉る。一切のものを抛つて、たゞ主獨を愛して、此身を残らず主に献げ奉る。

あゝ主イエズスよ、『主の外に我れ何をか天に有たん、地には主の外に我れ何をか慕はん、主は何時迄も我心の神、我が嗣業なり』(詩篇七五) 實に此世にても後の世にても、私の一心に希ふ所はたゞ主の愛のみである。あゝ『我心の神』なる主よ、今よりは如何なる物でも、此心に忍び入るを許さない決心であれば、何とぞ主獨り此心の主君となり給へ。私はたゞ主獨りのものとなりたい。たゞ主獨り私のすべての

寶、すべてのの休息、希望、愛となり給へ。私はひとへに主の愛を望み奉る。主の愛と聖寵とを恵み給はゞ、それで私には澤山である。他に一つとして望む所はない。

最も尊き童貞聖マリアよ、何とぞ私を憐みて忠實に主に仕へしめ給へ。私は一身を擧げて主に献げ奉りたれば、一度でも之を取戻すが如きことなからしめ給へ。アメン。

九、聖人となるには熱い冀望が必要である。

『聖人になりたい、屹と聖人になりたい』と云ふ熱い願望のない人は、逆も聖人にはなれない。熱い願望は鳥に於ける翼のやうなもので、これ無くては何うしても完徳の空へ翱翔ること出来るものではない。夫れも其筈で、聖人となるには心を世間の事物から厭離し、邪慾

を抑制へ、己に克ち、十字架を愛せねばならぬが、それには随分と骨が折れる、苦しい思もする。然れども熱い願望がありさへすれば、それに充分力を添へて貫へる、苦痛の重荷も餘つほど輕めて貫へるから、易々と目的の彼岸に達つくことが出来る。されば『勝たう勝たう、是非勝たねばならぬ』と云ふ熱い願望がある時は、もう半以上は勝つたものと云つても可い譯である。之を高い峻しい山の頂に攀ち登らうとする人に譬へても分る。是非とも登らねばならぬと云ふ熱い願望があると、其爲に無い勇氣までが出て来て、疲勞を疲勞とも思はないで、ごし／＼登つて行けるが、もしこの熱い願望がなかつた日には、少し疲勞れても直に厭な氣が起り、力を落して山腹にへたばつて了つて、何時になつても絶頂に達けるものではないのである。

斯う云ふ次第で、願望が熾であれば、それだけ完徳の道に深く高く進まれる。聖女テレジアの説によれば、『主は高い大なる願望を抱いて居る人を特更に愛して、之を引立て下さる。随つて我等の願望は大きなければならぬ。この願望よりして完徳の歩もすらくと歩つて來るのであるから、何う云ふことがあつても願望を小さく畫つてはならぬ。却つて主の御力に頼り、その聖寵に助けられ、絶えず努め勵んで怠らなければ、終には聖人等の達かれた所までも登れるものと、深く自ら信じて奮發せねばならぬ』。

すべて聖人等は其の激しい願望によつて、僅少の間に高い／＼完徳の絶頂へ攀ち登り、主の爲に驚くべき事業を成し遂げられたのである。聖アロイジオ　ゴンザガの世を去られた時は、御年僅か二十三歳に過

ぎなかつたのだけれども、早や非常に高い完徳の域に進んで居られた。パージの聖マリアマダレナは主の啓示を蒙り、此聖人が天國に於て受けて居られる光榮の大なるを仰視て甚く打驚き、「アロイジオ様よりも大なる光榮を享けて居る聖人は見當らない位でありました。してこの年若い聖人が、斯くまで高い聖徳の域に達せられたのは、全くその熱い願望の爲であつて、聖人は天主様を相應に愛したるものと連に望み、望むだけ愛し得ないのを見ては大變に悲んで、愛の致命を遂げられたからであります」と曰はれた。

聖ベルナルドは修道者となつてからは、「ベルナルド、ベルナルド、汝は何しに來た、ベルナルド汝は何しに此修道院に來た」と我と我身に問をかけて、熱心を振り興して居たさうである。我等も聖體の尊前に

に拜跪いて、屢々我身に問を掛けて見ねばならぬ。「汝は何しに天主様の御家に來た。何しに世間を棄てた、聖人となるが爲ではないか。今ま何を爲て居る。毎日、何の爲に時日を費して居る」と。何時も斯う云ふ問を我身に仕向けて、眠りかけた心を揺り起し、完徳の願望をいよく熾ならしめねばならぬ。願望が熾にならなくては何時まで經つても目的の地に達けるものではない。此願望を有たなければ、主イエズスに願はう、聖母マリアに願はう。幸ひに此願望を有つて居るならば、唯だ奮發するばかりである。なせ多くの人が聖人になること出来ないかと云ふに、つまり奮發が足りないからである。さらば奮發しよう、大に奮發しよう。何を恐れる。世間を振り棄てる程しの勇氣を恵み給うた主が、聖人になる丈の力をも與へ給はぬ筈があらうか。萬

事は終る。今の一生が幸福であらうと、不幸であらうと、間もなく過ぎ去つて了ふ。何時までも過ぎ去る憂のないものは唯だ永遠のみである。死ぬ時にも、永遠の世界に這入つてからも、我等の爲に慰籍となるのは、たゞ少しでも主の爲に盡した、たゞ少しでも主の爲に苦んだ、と云ふ所だけであらう。苦勞は今ま暫くであるが、其苦勞に報酬として與へられる光榮の冠は、永遠窮りなしである。聖人等は主の爲に苦勞したことを幾れほど喜んで居られるか知れぬ。もし天國に於ても『残念』とか『口惜しい』とか云ふ觀念が頭に浮べられるものとすれば、如何なる人でも、『主の爲にもつと善く働いて、もつと澤山苦んで居れば可かつたのに、今となつては何うすることも出来はしない』と曰つて悔しがらぬものはあるまい。

然らば今の中に大に奮發して、二度と得難い此の大切な時日を無駄に失はないやう心掛けねばならぬ。今日爲し得る所も明日は何うなるか分らぬ。シエナの聖ベルナルチノは曰つた『時は唯だの一瞬間でも、殆ど限りない價值がある』と。實に此の一瞬間で、失つて居る聖寵を取戻し、天の窮りなき福樂を手に入れることも出来るのである。

祈禱

『主よ、我心定れり、我心定れり』(詩篇五、六ノ八) 私はもう充分身構へして居る。何とぞ御望の程を告げさせ給へ。如何なる事を命じ給うても、私は腕打さすり、足踏み鳴らして従ひ奉るであらう。是迄も大に働いて御意を喜ばせ申すことが出来たのにも拘らず徒に時日を潰して何一つ出来たことないのは誠に口惜しい。それにしても今だに

私を見捨て給はず。過失を補ふべく時日を與へ給ふのは、感謝に堪へない所である。是からは一分間でも無駄に費すまいと決心して居る。私が聖人になりたいと一心に望むのは、後で我身に大なる光榮を蒙むり、澤山の樂を享けたい爲ではなく、唯だ主を愛し、御意を喜ばせ申したい爲め丈である。あゝ主よ、私に心を盡し力を盡して主を愛せしめ、御望に従つて、誠意より主に仕へしめ給へ。

主よ、私は主を愛し奉る。私は主を愛し奉る。主の爲とあらば如何なる骨折でも、苦痛でも厭はない決心である。何とぞ此願望をまします熾ならしめ、之を果すに要する聖寵をも恵み給へ。私の力ばかりでは何一つ出かしの得ないが、御助力によれば一として能はざることなしである。永遠の御父よ、御子イエズスに對して私の願を聽容れ給へ。

へ。最も愛すべきイエズスよ、御苦難の功德によつて私を憐み給へ。

私の依頼なる聖母マリアよ、御子の愛に對して私を護り給へ。アメン。

十、主の愛に酬ゆるに愛を以てせよ。

『主は己を無きものとして奴隷の姿を取り、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまで従へるものとなり給へり』(ヒリツボ)、と聖パウロの絶叫された所を以て見ても、主が如何ばかり我等を愛し給うたかと云ふことは明白である。己を無きものとする、全能の神の貴さを以て、全く己を無きものとするに云ふは、實にく驚くべき愛で、天使等ですら、主が我等を愛するの餘りに、淺ましい人間となり、人性の有ゆる惱み苦みを堪へ忍び給ふのを伏し拜んでは、如何ばかり驚

き入られたであらうか。

「而して聖詞は肉となり給へり」(ヨハネ一)、帝王の身にして拙い虫けらの愛に引かされて、自分で淺ましい虫けらに傷り果てられたと云ふならば、聞く人は如何なに仰天するであらうか。然るに全能全知の神が人と生れ給うたのは、たゞ夫れ位のことではない。況んやその神が身を以て人々の罪に代り、残酷たらしい、耻かしい十字架の刑にかけられて、御生命を果し給うたと云ふに至つては、もうく何とも形容すべき語さへない次第である、

實に救主の御死去ばかりは愛の極で、もし實際あつたことで、もなければ、到底信じられないほどの出来事であつた。神の御子が憐れ果敢なき此の涙の谷に天降り、三十三年の久しき間、貧しい、苦しい生

活をなし、果てはあの様な痛々しい御死去を遂げられたのは、畢竟人間にその窮りなき愛を示さんが爲であつた。實に主の御苦難御死去の原因は、煎じ詰めればその人間に對し給ふ驚くべき愛に外ならぬのであつた。

「誰も其友の爲に生命を棄つるより大なる愛を有てる者はあらず」(ヨハネ一三)と云へば、主イエズスが其敵なる人間の爲に、恐ろしい痛苦を受けて、御死去遊ばした愛に至つては、いよく驚かざるを得ないのである。この驚くべき愛を想つて、聖人等は萬事を抛ち、二つとなき生命までも犠牲として、潔く此の愛の天主に献げられた。視よ、素性から身分から賤しからぬ青年で、前途には洋々たる希望の光が漾うて居たにも拘らず、斷然己が家を出で、己が生里に離れ、財産をも父

母兄弟をも抛棄て修道院に隠れ、一身を主イエズスの愛に献げたものが幾れほど多いか知れない。花の姿の處女でありながら爵位もあり富もある方々より雨の様に申込んで来る縁談を振り切り、喜び躍つて刑場の露と消し失せて、己が爲に大悪人の姿となり、耻かしい磔柱の上に死に給うた主の愛に聊たりとも酬い奉らんと志したのも、數へるに違ないほどである。

實に主イエズスの我等に對し給ふ愛ばかりは、考へれば考へるほど不思議の至りで、何うしても本氣の沙汰とは思はれぬ位。聖パウロの如きは、『我等は十字架に釘けられ給へるキリストを宣傳ふるなり。是れユデア人に取りては躓くもの、ギリシヤ人に取りては愚なる事なり』(コリント前)と曰うて居られるほどである。いかにも未信者なるキ

リシヤ人等は主キリストが十字架に釘けられて死に給うたと聽いては全く信じ難い愚な事だと思つて居た。榮福限り在さぬ神様が、何うして己が僕隸たる人間の愛に驅られて死に給ふと云ふことが出來よう。それこそ全智の神様が人間を愛するの餘りに、全くの愚者となり給うたと云ふのも同様ぢやないか、と曰うて居たのである。

然しながら神の御子イエズスキリストが我等を愛して死に給うたと云ふは信仰箇條の一つで、聖パウロはエフエズ人に勸めて、『キリストも我等を愛して、我等の爲に己を犠牲として、神に捧げ給ひしが如くせよ』(エフエズ)と明に曰うて居る。さればパージの聖マリアマダレナは、かゝる恩愛極りなき主に對する人々の甚い忘恩の沙汰を思つて痛嘆措く能はず、『ア、識られざる愛かな、認められざる愛かな』と

叫ばれた。實に世の人が主イエズスを愛し申さないのは、職として其の驚くべき愛を識らないからであつて、誰にしても『天主様が私を愛してわざ／＼死んで下さつたよ』と思つたら、何うして其天主を愛する氣にならずに居られよう、『キリストの愛は我等に迫る』(コリント後)と聖パウロが曰つたやうに、一たび主の愛をつぐ／＼と默想したならば、心は忽ち炎々たる愛の火焰に熾せ立たずには居られない筈である。抑も主は一滴の血を流しても、我等を購ふこと能ひ給うたに、何なら御血の有りだけを滴め盡した上に、御生命までも犠牲にし給うたのであらう。たゞ我等がその無慘な御苦痛、殘酷かな御死去を仰視て、坐ろに感涙に咽び、餘儀なくも此の慈愛深き主を愛して、而かも力一杯に愛して、今よりは唯だ主の爲にのみ生存へるに至らんことを望み

給うたからではなかつたらうか、『キリストが凡ての人の爲に死し給ひしは、活ける人をして最早や己が爲に活きず、寧ろ己等の爲に死し且つ復活し給ひし者の爲に活きしめんごてなり』(後五ノ五)と聖パウロは明白に言うて居られる。

祈 禱

主よ、私は主の大恩に七重も八重も擲められて居ながら、何うして主を愛する氣にならないのであらう。主は私の愛を求めんとて、貴い貴い價を拂ひ給うた、御血も御生命も残らず投棄て給うたのである。かゝる大恩を忝うしながら、猶も一心と主を愛しないごあつては、それこそ憎むべき恩知らずの大罪人であらう。主は私見たやうな卑しい僕隸の爲に死に給ひたれば、私が主の爲に死ぬのは當然ではあるまい

か。主よ、私は萬事を抛つて、此身を全く主に献げ奉る。私の心を世間の事物より引き離して、之を残らず主に献げ奉る。

『我が愛するものは、萬人の中より選ばれたるものなり』(雅歌五、あ
あ主よ、私も主を萬てのもの、中より選みて、私の幸福、財寶、歡樂
と抱き締め奉る。私は主を愛し奉る。心の底より愛し奉る。私
は身を終るまで、繰り返しく『主よ、愛し奉る。主よ愛し奉る』
と申し上げたい。然し主は生温い愛を献げても満足し給はず、主の外
に何物かを愛するのを見兼ね給ふのであれば、私は何時も、何事に就
ても聖意を喜ばせ、一心と主を愛し申したい。たゞ主をのみ愛し申し
たい。主の外には一物たりとも愛しない決心である。あゝ主よ、私を
憐みて充分に主を愛せしめ給へ。

愛すべき童貞聖マリアよ、私を扶けて此の愛の天主を心より愛する
を得せしめ給へ。アメン。

十一、聖體と同居するを得る修道者の幸福。

『修道者の身分の有難い所以は二つ。一つは従順の願によつて一身を
主に献げ、全く主の所有となつて了ふことで、一つは聖體の中に籠り
在すイエズスと、始終一緒に住へる幸福である』と某の童貞女は曰
つたが、夫れは實際然うである。試に思へ、賤しい乞食風情のもの
が、帝王から召し出されて、禁内起居するの幸福を與へられたと
するならば、身に餘るの大恩よと幾重にも幾重にも感謝するであら
う。況して天の大王と同じ家に、而かも一生涯起居を共にするほど

の身分にして戴いた修道者は、千たび萬たび感泣鳴謝しても足りない譯ではあるまいか。

實に修道者は主イエズスと同じ家に住るのであるから、何時でも欲いた時に拜謁りすることが出来る。世間の人ならば一日に漸く一度夫れすら多くは朝ミサ聖祭の時に謁見に奉るに過ぎないのであるが、修道者だけは朝でも晩でも日中でも、望の儘に御前に進み出て、親しく打解け談話を交へることが出来る。主の方でも、自分が世間の荒海から救出して、修道院の波風静かな港へ引入れた僕婢等のことであれば、喜んで聖體の中より之に謁見を許し、之と睦むく物語をなし給ふに相違ない。

主は喧擾がしい中を厭ひ給ひ、閑静かな、人なき里に於て親しく其僕婢等と物語り給ふのである。所が世間の人は朝から晩まで色々の俗務に逐はれて居るから、たとへ聖體の尊前に咫尺いても心はそはくとして落付かず、蜜の様な主の御話を十分に玩味ふと云ふはなかく覺束ない。唯だ修道者だけは世間の喧擾に遠くかけ離れて、謂ゆる人無き里に住んで居るので、最も親密に主と交際つて行かれる。自分を愛して、自分の拜謁を受けんが爲に、夜となく晝となく御滞在遊ばす主の聖體の尊前に進み出て、心打解けて楽しい談話を交すことが出来るので、實に其時ばかりは、丁度天國にでも居るかの様に、何とも言ふに言はれぬ愉快を覺るのである。

「彼と共に語るは苦しからず、共に暮すは屈托にあらず、却て喜悅と愉快とを覺ゆ」(智書八)と聖書にもあるが、主の御側に侍つて居る時

の身分にして戴いた修道者は、千たび萬たび感泣鳴謝しても足りない譯ではあるまいか。

實に修道者は主イエズスと同じ家に住むのであるから、何時でも欲いた時に拜謁りすることが出来る。世間の人ならば一日に漸く一度夫れすら多くは朝ミサ聖祭の時に謁見を奉るに過ぎないのであるが、修道者だけは朝でも晩でも日中でも、望の儘に御前に進み出て、親しく打解け談話を交へることが出来る。主の方でも、自分が世間の荒海から救出して、修道院の波風静かな港へ引入れた奴婢等のことであれば、喜んで聖體の中より之に謁見を許し、之と睦しく物語をなし給ふに相違ない。

主は喧擾がしい中を厭ひ給ひ、閑静かな、人なき里に於て親しく其

奴婢等と物語り給ふのである。所が世間の人は朝から晩まで色々な俗務に逐はれて居るから、たとへ聖體の尊前に咫尺いても心はそはくとして落付かず、蜜の様な主の御話を十分に玩味ふと云ふはなかく覺束ない。唯だ修道者だけは世間の喧擾に遠くかけ離れて、謂ゆる人無き里に住んで居るので、最も親密に主と交際つて行かれる。自分を愛して、自分の拜謁を受けんが爲に、夜となく晝となく御滞在遊ばす主の聖體の尊前に進み出て、心打解けて楽しい談話を交すことが出来るので、實に其時ばかりは、丁度天國にでも居るかの様に、何とも言ふに言はれぬ愉快を覺るのである。

「彼と共に語るは苦しからず、共に暮すは屈托にあらず、却て喜悅と愉快を覺ゆ」(智書八)と聖書にもあるが、主の御側に侍つて居る時

に、屈托くつたくなぞ感ずるかんのは愛あいの足りたりないからであつて、満腔まんくわうの愛情あいじやうを傾かたむけて主しゆを愛あいする人ひとは、必ずかならず聖體せいたいの中うちに其その萬まんの寶たから、其その萬まんの休息やすみ、其その樂たのしい天國てんこくまでも見出みいだす筈はずである。されば修道者しうだうしやたるものは屢々しばしば聖體せいたいの尊前みまへに咫尺ちぢくき、成なるだけ長ながく主しゆと物語ものがたり、愛情あいじやうでも、日々にちごとの困難こんなんでも、主しゆを愛あいしたい熱望のぞみでも、現世このよでは何事なにごとに限かぎらず主しゆの聖意みこころを喜よろこばせ奉たてまつり、後のちの世よでは面ま面に其その聖顔せいがんを仰視あふぎみて樂たのみたい熱望のぞみまでも、御足みあしの下もとに献さげて、唯ただだく主しゆの愛熱あいねつに燃立もれたつやう努つとめなければならぬ。

祈いの 禱り

あゝパンの形色けいしよくの中うちに隠かくれ給たまふイエズスよ、私わたしは恭うやしく尊前みまへに咫尺ちぢくき奉たてまつる。主しゆが私わたしの愛あいに驅かられて、御身おんみを十字架じふがじやう上に犠牲いけにへとなし給たまうたのみならず、今いまでも此愛このあいの牢屋らうやに閉とぢ込こめられて、絶たわす私わたしを愛あいして下くだ

さるのは、何なんと云いふ難ありがた有たい御慈愛おんいつくしみであらう。思おもへば私わたしは主しゆに背そむいたものもなければ、私わたしよりも篤あつく主しゆを愛あいし奉たてまつる人は寡さくからずあるのに、主しゆは夫等それらの人々ひとびとを措おいて、特とくに私わたしを選えらんで御家おんいへに招まねき入れ、御ご一緒いっしょにお住居すまひするの幸福さいはひまでも與あたへ給たまうた。主しゆは實じつに此この拙つたない、罪深つみやかい私わたしをば、浪風なみかぜ荒あぶる世間せけんの洋中やうちゆうから救出きうしだつして平穩へいゑんな修道院しうだういんの港みなとへ引入ひきいれ、始終しじゆう主しゆと一致いちして樂たのしい月日つきひを送おくらせ、後々のち々は天てんの御國みくにに於おいて、面ま面に聖顔せいがんを仰視あふぎみて、千代ちよ代よに八千代やちよ代よに御愛おんあいし申まをさせようと思召おほしめし給たまうたのである。あゝ私わたしは何者なにものであればこそ斯かる幸福さいはひを忝かたじけなうするこ

と出來たのであらう。今いま一心しんと此大恩このだいおんを感謝かんしゃし奉たてまつる。

「我わがれ罪人つみびとの帷幄さはりに住そはんより、寧むしろ我神わががみの御家おんいへに賤いやしめらるるを選えらめり」(詩篇しへん八三)とダビド聖王せいおうは歌うたつて居ゐるが、私わたしも然さう云いふ決心けつしんである。

私も世間を棄て、修道院に這入ること出来たのを何よりの幸福と思ひ、世間の金殿玉樓に住はんよりか、寧ろ主の御家に賤しい職務を執り、貧しい生活をなすのを何よりの幸福とするのである。あゝ主イエズスよ、私の献身を受け納れ、一生の間主と共に住はしめ給へ。私の罪を見咎めて此處を逐ひ出し給ふな。此處に住んで居る兄弟姉妹等は、皆な善の花美はしく、徳の香床しく、忠實に主に仕へて居られるのに、ただ私だけが如何にも見すばらしい罪人ではあれど、何とぞ私を退け給はず、この兄弟姉妹等の中に交つて、御仕へ申すの幸福を得せしめ給へ。

私は長らく主に遠つて居たにも拘らず、主は猶ほ私を見限り給はず、却て御憐れを垂れて私の眼を開き、迷の夢を醒して、世間の儂く、恃

み難きを明白に悟らして下さつたから、私は感涙に咽び、何時迄も御足の下を離れまいと決心して居る。主よ、私は御前に侍つて居るよと思へば、勇氣は日頃に百倍して、如何に強い誘惑でも難なく打破ることも出来れば、主を一心と愛し、心より主に頼り絶るべきことも忘れられない。私は何時も御側を離れず、絶えず主と一致し、緊く主に愛着いて動かない決心である、

さても愛の秘蹟の中に隠れ給ふイエズスよ、私は一心と主を愛し奉る。主は私を愛し給へばこそ、夜となく晝となく、此の聖體の中に籠り在すのであれば、私も主を愛して、何時も主の尊前に拜伏したい。主は茲に閉ぢ籠つて絶えず私を愛し給へば、私も主と共にここに閉ぢ籠つて、絶えず主を愛し申したい。然り、我等は何時までも此處

に住んで居たい。今ま共々に此處に住み、後では天の御國に於て、亦た共々に何時までも樂みたいものである。私の望は唯だ是ればかりで、此望だけは何うにかして之を遂げるを得せしめ給へ。

至聖なる童貞マリアよ、何とぞ私の爲に聖體を熱愛するの情を請求め給へ。アメン。

十二、修道者の境遇は最も主イエズスの夫に近い。

聖パウロの説に依ると『天主は御子の御狀に肖たものでなければ、天國に這入らして下さらぬ』(ローマ八)と云ふことである。然らば主イエズスの境遇に最も近似い生活を爲すべく召された修道者は、如何に幸福で、又た如何に安心して天國を蒞ち設けることが出来るであらう

か。主は現世に在す間と云ふものは、極めて慘な生活を爲れた。ナザレトの貧しい家に職人の徒弟として、身には粗末な服を着け、口には不味い物を食べ、毎日汗水滴らして働かれた。實に己は『富める者にて在しながら、己が貧さを以て我等を富ましめんとて、我等の爲に貧しき者となり給へり』(後八ノ九)である。

加之、御降誕より御死去までと云ふものは、始終苦んで惱んで、世間の快樂に遠かり、豫言者からは『苦痛の人』(イザヤ五)と呼ばれ給ふ位に、有ゆる苦行難行を勤め給ひて、御自分の弟子たらんものは何人にして、己に克ち、身を犠牲に供へる覺悟でなければならぬと教へ給うた。『人もし我後に跟きて來らんと欲せば、己を棄て、己が十字架を取りて我に従ふべし』(マテオ十)とは、實に主がその弟子たらんもの

に示し給うた唯一の道である。斯の聖鑑と聖言とに従つて聖人等は、浮世の財寶快樂を抛ち、最愛の主なるイエズスの後から色々の艱難を背負ひ、十字架を擔いで足取勇ましく進まれたものである。

聖ベネチクトを覽よ其身は伊太利亞國ヌルシアの貴族で、羅馬皇帝ユスチニアノの親戚でありながら、花ならば漸く朱唇を開きかけたと云ふ僅か十四の歳に、其財産も爵位も快樂も潔く抛棄て、スブラコと呼べる奥山の洞穴に隠れ、ロマヌスと云ふ修道者が人知れず送つて呉れる情けのパン一片を以て、幾年の間露の生命を繋いで、専ら身を修め徳を煉られた。

アシジオの聖フランシスコは、父から貰つたものは唯つた一枚の襦衣に至るまで、悉く父の手に返却して了つて、一身を主イエズス

に献げ、極めて貧しい、難儀な生活を爲れた。聖フランシスコは、ボルジアは西班牙のガンヂ公爵。聖アロイジオ、ゴンザガは伊太利亞のマンツア侯爵と云ふ貴い身分でありながら、その豊かな財産も、廣い領國も、忠實な臣下、懐かしい故郷、美しい邸宅、愛らしい父母兄弟までも残らず打棄て、甘んじて一介の貧しい修道者となられたのである。

エチオピアの皇女福者ゼドメラは、國王となるの權利を抛つて、聖ドミニコ會の修道女となり、ポルトガルの福者ヨハンナは、頭にイギリスや、フランスの皇后の玉冠を戴く代りに、寧ろ喜んで粗末な修道女の被布を被られた。其他、男にせよ女にせよ、家富み位貴く、有ゆる榮華の中に一生を送れる身を持ちながら、世間を離れて幽暗い修道

院に隠れ、人には全く忘れられて、貧しい苦しい世渡をされた方々は指折り數へるに違ないほごで、ベネチクト會だけにでも、二十五人の皇帝、六十五人の王と皇后とが數へられる位である。

あゝ實に幸福な人と呼ばれるに足るものは、世に幅を利かせ、榮華を誇つて居る富豪や貴人ではなく、寧ろ斯う云ふ熱心な修道者であらう。世間の人々は、今でこそ彼等を輕視んで『愚者よ、狂者よ』と思つて居るであらうが、公審判の曉になつたら、却て自分等こそ『愚者であつたよ、狂者であつたよ』と悟つて、如何に嘆息もし、失望もするであらうか。聖人等が玉の高座に坐つて、主の御手より光眩き金冠を戴かれるのを仰視ると、いよゝゝ失望の溜息を漏して『あゝ彼の人々こそ、嘗て我々が有ゆる熱罵冷笑を投げつけて遣たものである。我

々は愚にも彼の人々の生活を如何にも馬鹿げかへつたものゝ様に考へて居たのであるが、今になつて見れば、彼等は神の愛子の中に數へられ、聖人の仲間之列なる身の上となつて居るではないか』(智書五)と血の涙を飲んで悔恨しがらるであらう。

祈 禱

主よ、私は特別の聖恩を蒙り、御跡を踏んで進むべく召されたものであれば、深く此大恩を感謝し、萬事を抛つて主に従ひ奉る。あ天地の大王、全能の天主よ、主は私の愛に騙られて此の涙の谷に天降り、貧しい苦しい月日を送つて、世に美はしき聖鑑を垂れ、私を奨め勵まして下さつた。伏して願くは私の前に立つて進み給へ。私は屹と後より従ひ奉る。如何なる十字架を與へ給うても、主の御援助に頼

つて、何處までも辛抱して之を擔ぐであらう。私は是まで世間の虚しい榮譽、果敢い快樂を追つて廻つて、主を打棄て申したのを今更の様に悔み悲み、今後は如何様のことがあつても、二度と主に遠かりはすまいと決心して居る。主よ、私の身をも主と共に十字架に縛り付け給へ。私は素より淺間しい罪人であれば、時としては十字架を厭がつて、主に反抗はうとするかも知れないから、主の心地よき愛の綱もて緊しく繋ぎ止め給へ。一度でも主を打棄て申すことを許し給ふな。

あゝ主イエズスよ、私は今より潔く世間の快樂を振り棄てること決心して居る。主を愛し、主の降し給ふ苦痛を堪へ忍んで、御後に従ひ奉るのは、私の爲に何よりの快樂である。私も一度は天の御國へ昇り、主を面りに仰視、強いく愛の鎖に繋がれて、主に遠かる憂もなく、

永遠に主を愛し奉ること出来るであらうと、唯だ夫ればかりを何よりも樂として居るのである。主よ、私は主を愛し奉る。何時迄もく愛し奉る。

ア、聖母よ、私の希望は唯だ是れだけである。御身は此世に於て最も御子に近似つて居られたから、天に於ても權能最も勝れ、如何なる聖寵でも願ひ受けること能ひ給へば、何とぞ私の爲に傳達ぎ、この聖恩を請ひ求め給へ。アメン。

十三、修道者は人の救靈を熱望まねばならぬ。

修道者は救主の聖跡に従ひ、身を修め徳を煉りて、自分の救靈を謀らねばならぬは言ふ迄もない所であるが、亦た夫と共に他人の救靈ま

でも世話して遣らねばならぬ。その爲には必ずしも外へ出て布教をしなくとも、祈禱や斷食や、其他の苦行やを以ても意外の働をなすことが出来るのである。

主イエズスの現世に天降られたのは、人を救ふが爲めであつたから、他人の救靈の爲に奔走いたり、祈つたりするのは、主を愛するの赤心を表はす所以で、主も嘗て聖ペトロに向つて、『ヨナの子シモン、汝、我を愛するか……我羊を牧せよ』(ヨハ子二)と曰うた。『斷食をせよ』とか、『苦行を以て身を責めよ』とか、『祈禱や默想や其他の善業を務めよ』とかは仰しやらずに、唯だ『我羊を牧せよ』と命じ給うた。して我等が他人のために盡した所は、皆な御自分に爲て貰つたかの様に喜び給ふので、『汝等の此の最と小き兄弟の一人に爲せしは、我に爲せしなり』

(マテオ二)とまで曰うた位である。

されば修道者たる者は、豫ねぐ他人の救靈に心を配はり、之を熱心に望み、之が爲に精一杯の力を盡さねばならぬ。もし長者から布教の手傳をする様にでも命せられた時は、萬事を忘れて専ら其事をのみ思ひ、骨を惜まず身を顧みず、一心と立働かねばならぬ。命せられた役目を喜んで承引けるでもなく、唯だぐ自分の靈魂の世話だけをして、自分さへ救れば他人は何うでもと云ふやうな心掛けでは、眞正な修道者の精神を有つた人とは思はれない。

主の片腕ともなつて救靈の爲に働くと云のは、我等の身に取つては非常な名譽である上に、主を心より愛するならば、幾ら自分獨りで愛しても物足らぬ心持がして、必ずダビド王の如く『我と共に主を光榮

せよ。諸共に其聖名を稱へよ』(詩三三)と叫んで、全世界の人を残らずでも引き連れて来て、主を愛させ申したいと一心に冀ふ筈である。さればこそ聖アウグスチノも『主を愛するならば、萬民を驅りて主の愛に引付けよ』と曰つたのである。

熱心に人の救靈を計つてやれば、それと共に己が救靈をも安全ならしめる。『衆多の人を義に導ける者は、星の如くなりて永遠に至らん』(ダニエル)、とダニエル書には録されてあり、聖アウグスチノは、『汝が人の靈魂を救つたのは、汝の靈魂を救靈に豫定したのである』と曰つたのを見ても明白であらう。

祈禱

ア、主イエズスよ、私見たやうな不束者が、人の靈魂を救ふと云ふ

聖い務に當らせられるのは、感謝に堪へない所である。私に何うして斯る名譽の任務を托け給うたのであらう。私は色々と自分で罪を犯して、主に背き參らしたのみならず、人までも主に背かせ申す原因となつたものである。それに主は私を振り棄て給はざるのみならず、斯う云ふ大事業にまで手傳はしようと思召し給うたのであれば、私も有らん限りの力を盡して主に従ひ奉る。如何なる疲勞でも、困難でも厭ふ所ではない。血までも生命までも喜んで抛つ覺悟である。

然し私が人の救靈の爲に立働くのは、決して私一個の意志に従ふ爲でもなければ、人に讚嘆され、敬重じられたい念からでもなく、唯だ主を人々に識らしめて、一心と愛させ申したいと云ふ願望の上からである。私は斯う云ふ聖い務を命じられたのを身に餘るの幸福と思ひ、

只管主の光榮を宣揚の申すことに力を盡し、我身の榮譽などは全く顧みもしない考である。唯だ主獨りが有ゆる光榮を得、満足を覺わ給ふべきで、難儀をして、屈辱められて、苦勞を見るのは私見たやうな罪人の分である。主よ、此の賤しい罪人が主を愛し、人にも教へて愛させたものご一心に冀うて居る其の微志を嘉納し給ひ、之を果すに要する聖寵を恵み給へ。

最と力ある保護者と崇められ給ふ聖マリアよ、御身は萬民の救靈を望み給へば、何とぞ私に力を添へて、善く此務を盡さしめ給へ。アメ

十四、修道者は柔和謙遜ならねばならぬ。

主イエズスが如何に柔和謙遜であらせられたかと云ふことは、『羔』と呼ばれ給ふのを以ても知られる。主は常に御自分が柔和謙遜で、羔のやうにあらせられたのみならず、弟子等にも取分け此の二つの徳を修め行ふやうに命じ給ひて、『我は柔和にして心謙遜なるが故に我に學べ』(マテオ十)と呉々も曰うた。然らば主の聖い御一生を模範として、身を立て、行を研いて行くべき筈の修道者にあつては、何はさて措いて此の二徳を學ばなければならぬ。

野山に隱遁して、身獨で主に仕へて行く人の爲には、柔和の徳なぞ左まで必要でないかも知れぬ。然し多人數相集つて一緒に暮して居る修道者の身に在つては、長者から咎められることもあらう。朋友から氣障なことを言はれたり、爲れたりすることもあらう。随つて柔

和の徳に十分身を固めて居なかつた日には、思はず識らず多くの過失に陥つて、心の平和を失ふに至るに相違ない。されば修道者たるものは、外にも内にも、長上に對しても部下に對しても、極々柔和でなければならぬ。人に輕んぜられたり、咎められたりする時に、一たび柔和の色、謙遜の心を以て夫を堪へるのは、百の斷食、千の苦行よりも價値あるものぞと堅く信じて疑うてはならぬ。

人によつては、斷食だの苦行だの、やうな外部の制慾を以て眞の完徳と思ひ違へて、之には熱心に骨折つて居るが、唯つた一口氣障なことを言はれても直に顔を脹らす、荒々しい返答をする。侮辱を堪へるのは、右様の制慾よりも幾れほど優れて、價値あるものぞと云ふことを全で知らない様な塩梅である。斯う云ふ人に限つて、自分の氣に合

ふことを言はれたり、爲れたりする間は、何時もにこゝ顔で、柔和なること羔の如しであるが、もし少しでも反對をされる、咎められる、輕んじられるやうなことであると、直に化の皮を脱ぎ棄て、恐ろしい狼になつて了ふのである。柔和は何人にでも必要であるが、特に人の長上たるものには無くて叶はぬ徳で、嚴しい顔、怒つた聲で怒鳴りつけるよりも、優しく柔和に教へ諭した方が、部下の耳にも入れば、心にも染み込むものである。

兎に角、如何なる場合に臨んでも、堪忍を守り、柔和を失はない人こそ徳に秀て居る證據で、斯る人が主の聖心に適ふは云ふまでもない所である。修道者たる者は毎朝黙想の時に、自分に快からぬ、不愉快な事を想像し、之を熟々と打眺めて、我心を固め置き、いよゝ然う

云ふ場合に出遭はしたならば、無理にでも我と我胸を制へて、心を擾したり、痲癢を發したりしないやう努めなければならぬ。其爲には聖フランシスコ サレジオの如く、心が動き、胸が擾いで居る間は、決して一言でも出さないことにするが上策である。

然し輕侮られ、凌辱められても、心を取擾さない爲には、是非とも謙遜の土臺を据て置かねばならぬ。心より謙遜な人は幾れほど輕侮られても、凌辱められても、決して心を騒さない。なるほど感じの上から言へば、厭な氣も起るであらう、胸も痛むであらうが、然し心では、『私のやうな悪人は、輕侮られるのも、凌辱められるのも當然ぢや。イエズス様は何人からでも尊敬れ給ふべき御身でありながら、却て私の爲に有ゆる輕侮凌辱に飽かされ給うたんだもの。私も其聖鑑に倣

ふことが出来るのは何たる幸福でせう』と思つて、寧ろ夫を喜ぶのである。

聖フランシスコの弟子のユニベルは、何かの侮辱に遭はされると、天から寶玉でも降つて來たかの様に、服の裾を褰取つて、之に包む風をするのであつた。實に世間の人が吸々として名譽を搜すのに反して、聖人等は熱心に侮辱を望み求められた。されば修道者の身でありながら、主の爲に凌辱の一つでも堪へきれないやうでは、眞正の修道者ではない。斯る人こそ何時になつても傲慢人である。幾ら謙遜家のやうに見ても、實は巧に謙遜の皮を被つて居る傲慢人に過ぎないので、到底『傲慢人に逆ひ謙遜なる人に聖寵を賜ふ』(西ノ六)と云ふ主の御寵愛を辱うすることが出来るものでない。

祈禱

至つて謙遜なるイエズスよ、主は私を愛するの餘り、十字架に磔けられて死に給ふまでに深く謙遜し給うた。それに私は數々の罪に汚れた大悪人でありながらも、なか／＼の傲慢人で、僅かの輕侮凌辱すら、ちつと堪へ忍ぶことが出来ない。是れでは何うして尊前に咫尺いたり、「主の弟子でゐる」と威張つたりされよう。幾度か地獄の底へ突き落され、永遠窮りなく悪魔の足下に踏み付けらるべき筈の身を持ちながら、何うして斯う云ふ傲慢が起されるのであらう。あゝ耻辱に飽かされ給うたイエズスよ、私を援けて主の如く柔和謙遜ならしめ給へ。私は今より斷然行を悔め、志を立直し、主が私の爲に有りと有ゆる輕侮を浴せられ給うた如く、私も主を愛して、如何なる凌辱で

も甘んじて受け耐へる決心である。

あゝ私の愛するイエズスよ、主は一生の間、様々の輕侮、凌辱をば喜んで堪へ忍び給ひたれば、私も今より、主と共に、主の爲に辱められるのを何よりの名譽と心得て、聖パウロの如く『我は主イエズスキリストの十字架に於ての外は、決して誇ることもなかるべし』(ガラチ一)と言ふほごになりたいのである。

最も謙遜なる童貞聖マリアよ、御身は何事に於ても御子に近似て居られたが、特に痛苦、凌辱を堪へ忍ぶに付けては、そつくり御子の生寫と呼ばれ給ふ位であつた。願くは私の爲に聖寵を祈りて、今よりは如何なる凌辱でも甘んじて受け堪へしめ給へ。アメン。

十五、修道者は特別に聖母の御保護が蒙られる。

聖母マリアは誰彼の別なく、萬の人を愛し給ふ。天主を除けば、天にも地にも聖母ほご人を愛するものなく、聖母ほご人を愛すること出来るものもない。普通の人さへも左ほご愛し給ふと云ふならば、況して御子イエズスの爲に一切を抛棄て、自由までも、生命までも振棄て顧ない所の修道者を愛し給はぬ筈があらうか。彼等の行動が御自分のにも御子のにも、さも似たるを見給うては、何うしても愛せざるを得給はぬのである。加之、修道者は何時もく聖母の光榮を歌ひ、聖母の爲に九日祈禱を勤め、ロザリオを爪繰り、斷食をなし、其他色々信心の勤を行つて、絶えず聖母を敬愛し、人にも勧めて敬愛させ

る。屢々聖母の尊前に拜跪さ、その聖名を呼んで御助力を祈り、取分け終を全うする御恵だの、惡魔の誘を防ぐ力だの、浮世の事物と潔く手を切る聖寵や、主に對する熱愛や、すべて聖母の聖意に適ふ所の聖恩を熱心に祈るので、夫れを見られたばかりでも、聖母は一方ならず喜び給ふのである。

斯様な次第で、修道者は聖母の特更ら手厚き御保護を辱うすることが出る。『我は我を愛する者を愛す』(箴言八)と云ふ聖言は、取つて以て聖母に當てはめられるので、聖母は何うしても御自分を敬愛する人を忘れること叶ひ給はぬ、僅かの信心にでも驚くべき恩恵を以て報い給ふ。よし如何なる罪の鎖に繋がれて居るにしても、苟くも聖母を敬愛し、人にも敬愛させる人ならば、必つと其罪の鎖を解放されて、

天國に案内して戴かれるのである。

されば修道院に入つて、他の修道者の美しい鑑に勵まされ、ますます熱心に聖母を敬愛し、聖母をば『あゝ我等の樂、頼み、生命、援助』と呼んで、一心と敬愛するの聖寵を辱うした修道者は、何よりの大恩を蒙つたものと心得て、平生篤く感謝せねばならぬ。

祈 禱

ア、最愛の御母マリアよ、私を世間の危い中から救ひ出して此修道院に引入れ、特別に御身を尊敬するの幸福を與へ給うたのは感謝に堪へない所である。私は卑しい罪人ではあるが、愛子の中に加へ、彼等と列んで御前に仕へるを得せしめ給へ。私は天主の次には、唯だ御身にのみ信頼み、唯だ御身をのみ一心と愛し奉るのである。

私は災難に罹り、憂に沈み、悪魔の誘に遭ふ度毎に、直と御腕に縋り付き奉る。御身は實に私の又なき避難所である。唯一の慰籍である。此世に於ける戦の激さ、悲哀の辛さ、憂苦の堪へ難さなどを思ふ毎に、唯だ天主と御身とに信頼るより外はない。私は全世界に王たらんよりは寧ろ甘じて御身の僕婢となりたい。御身に仕へ、御身を讚美し、御身を一心と愛することさへ出来れば、私の爲には澤山である。別に何とて欲しい所はない。

あゝ聖母よ、御身は『永續の母』にて在せば、死ぬまで忠實に御身に奉仕へるの恩を賜ひ、一度は必ず御身の樂み給ふ天の御國に到り、永遠に御身を讚め、何時までも御足の下を離れざるの恩恵を得せしめ給へ。アメン。

修道者の心得 大尾

附録

一、人生の果敢いこと。

聖書には人生の果敢いことを述べて、『萬事過ぎ去れり』(五ノ九)と曰つてある。短い語ではあるが、悪人は地獄に於て、切齒しつゝ、何時迄も之を繰り返し、善人は天國に於て、言ふべからざる喜悅に溢れつゝ之を口ずさみ、私も一度は必ず之を言ひ出さねばなりません。然らば、

一、悪人が此語を口にする時は何を意味するのでせうか。

『萬事過ぎ去れり』とは、世に在る間に、私は何よりの幸福と楽しんで居たものは、皆んな過ぎ去りました、而かも永久に過ぎ去りました、と云ふ意味ではありますまいか。

私は財寶を幸福と思つて居ました。財寶を求めて財寶を獲ました。然し早やその財寶は過ぎ去りました。而かも永久に過ぎ去りました。名譽を幸福と思つて居ました。一心と名譽を搜して名譽を獲ました。然し今はその名譽も過ぎ去りました。而かも永久に過ぎ去りました。快樂を幸福と思つて居ました。快樂を搜して快樂を獲ました。然し今はその快樂も過ぎ去りました。而かも永久に過ぎ去りました。地獄に墮落したものの、中に、財産家であつたものは、『あゝ私の財寶は過ぎ去りました』と叫び、帝王であつたものは、『あゝ私の爵位も名譽も過ぎ去りました』と嘆き、放蕩家であつたものは、『あゝ私の快樂は過ぎ去りました』と狂ひ悶へるであります。

修道者の身でありながら、財寶に心を奪はれ、名譽を望み、快樂を漁り

求めて、地獄に突き落されるやうな不幸にでも陥つたならば、必ず切齒しながら『あゝ財寶も過ぎ去りました。名譽も、快樂も過ぎ去りました。而かも永久に過ぎ去りました』と泣き叫ぶに相違ありません。

二、善人が此語を口にする時は何を意味するのでせうか。

『萬事過ぎ去れり』とは、世に在る間に、私の爲に何よりの不幸と人目に見えて居たものは皆な過ぎ去りました。而かも永久に過ぎ去りました、と云ふ意味ではありませんまいか。

私が汗水滴らして働いて居るのを見て、災難に惱まされ、讒言を浴せられ、侮られ、辱められ、苦行を勵み、身を責め懲らし、親切を盡して却て仇を報いられ、善業を働いて却て惡様に言ひ做されるのを見て、人々は私を『可哀想だ』と言つて居りました。然し其等は皆んな

過ぎ去りました。而かも永久に過ぎ去りました。

ペトロには十字架の疼痛は過ぎ去りました。ステファノには石殺の苦惱は過ぎ去りました。ラウレンシオには火刑の責苦は過ぎ去りました。すべての聖人に、その勞働は過ぎ去りました。その悲痛は過ぎ去りました。嘲弄も侮辱も過ぎ去りました。而かも永久に過ぎ去りました。今は唯だ喜悅ばかりです。歡樂ばかりです。朽ちざる光榮、變らざる休息、窮りなき福樂、たゞ夫ればかりであります。

三、私が此語を口にする時は、何を意味するのでせうか。

『萬事過ぎ去れり、即ち澤山の日數が過ぎ去りました。澤山の月數も、年數も過ぎ去りました。私の生命は陰影の如く過ぎ去つて了ひました』と云ふ意味ではありますまいか。『人生僅に五十、七十は古來稀なり』

と申しますが、その五十年か七十年かの中から、何んにも分らずに過ぎした幼年時代を取つて除け、寢る爲に、休息む爲に、食べる爲に費した時間を控除れば、餘る所は誠に僅少であります。

此の僅少な短い生命を、彼の昔し八百年、九百年も生存へた人々の生命と比べて見なさい。況んや之を永遠の生命と比べて見なさい。舊約のヨブ聖者が、『婦の産む人はその日少くして艱難多し』(十四)と云ひ、『我が日も幾何もなきにあらずや』(二〇)と嘆息したのも無理からぬことではありませんか。

私が天國に旅行する日數は斯れほど僅少いのです。それに行く／＼邪路に跳び出したり、世間の空しい事物に引懸つたりして、此の僅少い時日を徒に潰して了ふのは馬鹿々々しいことではありませんか。今

までそんな事であつたならば、今度と云ふ今度は是非とも一心と悔い
悛め、明日とは云はず、今日から善業に手を着けて、過去の怠慢を取
り返し永遠の休息に入るべく急がねばなりません。

二、死。

今ま私は重い病に侵され、臨終の苦悶に迫つて居ると想像しませう。

あゝ天主様、私に聖寵を垂れて充分に死の準備をなさしめ給へ。聖

母マリア、守護の天使、保護の聖人、私の爲に祈り給へ。

一、死とは何ぞや。

人は一度は必ず死なねばならぬ。早かれ晚かれ一度は必ず死なねば
ならぬ。然らば私も一度は必ず死にます。たとへ修道者であつても、

たとへ幾ら強壯で、幾ら衛生上に注意して居つても、一度はかならず
死にます。

死ぬ時には萬ての人と訣れる、懐しい親兄弟とも訣れる、親しい朋
友とも訣れる、住んで居る家とも訣れ、務めて居る役目とも訣れ、萬

てのものに訣れる。何一つ手に残る所のものはありませぬ。浮世のも
のは斯様に果敢いものである。幾れほど愛着して居つても、一度は仕
方なくくも訣れねばならぬ。然らばそんなものに曳かれて靈魂を忘

れ、天主様に背き、罪を犯すのは、馬鹿くしいことではありませぬか。

死ぬ時に靈魂は肉身と訣れて、永遠の世界に入る。其處には住所が
唯だ二つ、天國と地獄、天國は總ての快樂の満ち溢れて一つの痛苦も
ない所、地獄は有らゆる痛苦の集りて一つの快樂もない所。あゝ天國

と地獄！限りなき喜悅と極りなき悲嘆！私は必ず何方にか片付かねばなりませぬ。今俄に死ぬことにでもなつたら、何方の永遠に入るでせうか。天國でせうか、地獄ではありますまいか。夫れは死ぬ時の心の状態次第……、もし善くして死んだら永遠に幸福ばかり、歡樂ばかりであります。が、悪い最期でも遂げたものなら、夫れこそ大變で、永遠に切齒して泣き叫ばねばなりません。まい。

ですから善き最期を遂げることさへ出来れば、今はたとへ人に持囃されなくても、今はたとへ卑しい職務を勤めて居つても、今はたとへ病氣ばかりで、心配ばかりで、辛いこと、苦しいことばかりで、毎日泣いて月日を送つて居るにしても、何の損する所があるでムいませうか。

之に反して、もし悪い最期を遂げて、不幸な永遠にでも入ることになつたら、今は幾ら人に讀め囃されて居たからとて、幾ら才智があり、學問が出来て世に重寶がられて居たからとて、幾ら修道者となつて人に敬ひ尊ばれて居たからとて、何の益に立つてありませうか。

斯う云ふ譯ですから、私は何時もく死の準備をして居なければなりません。死は生の影であれば、善い行爲には立派な死の影が寫るけれども、悪い行爲に善い死の影が射さう筈はありません。今私の心の状態は何うですか。果して善い影の射すやうな行爲をして居ますか、篤と黙想して見なければなりません。

二、死の場合。

私は何時死ぬでせうか、

分りませぬ。

何處で死ぬでせうか、

分りませぬ。

如何様にして死ぬでせうか、

分りませぬ。

何に原因して死ぬことになるでせうか、

それ分りませぬ。

急に死ぬかも知れませぬ。急に氣を失つて、秘蹟を授かることも出来ずに死ぬかも知りませぬ。だから何時でも覺悟して居なければなりません。イエズス様は屢々死の準備を勧められた。諭話の結句には何時でも御定りの様に「然らば汝等用意してあるべし」と仰しやるのであります。今ま私は用意して居ますか。今の儘で死にたいですか。死ぬ時になつてから、「之を告白して居れば可かつたのに！」と思ふやうなことが未だ心に残つて居ませんか。残つて居るなら、此の默想の序に夫れを立派に告白して置ませう。死ぬ時には告白する暇があ

るやら無いやら薩張り分りませんから。

あゝイエズス様、私の心を照して、一度は是非なく死なねばならぬと云ふことを覺らしめ給へ。而かも死ぬ時には親兄弟にも訣れる。肉身にも訣れる。名譽も職務も快樂も、一つでも持つて行きはしません。たゞ持つて行くものは、一生の間行つた善と惡だけでありますから、今からは何よりも勵むべきものは善で、何よりも恐るべきものは惡だと云ふことを、しみぐと私の心に浸み込ませ給へ。さうなつたら何時でも、何をなすにも「今ま死ぬかも知れぬ、之を爲ながら死んでも差支ないか、安心されるか」と我と我身に尋ねて見、朝起きては今日の中に死ぬかも知れぬと思ひ、晩になると今夜の中に死ぬかも知らぬと考へ、一寸の間でも死ぬことを忘れないやうになつて、ま

すく善を修め、徳を積み、熱心な修道者となることが出来るであ
りませう。アメン。

三、審判の準備を怠つてはならぬ。

キリスト様が裁判の席に坐し、私を前に引据ゑて、一生涯の思言、
行に就て、一々厳密にお糺しなさると想像しませう。

一、被告と判事。

私は修道者であつても、一度は必ず天主様の法庭に出頭して、その
恐ろしい審判を受けねばなりません。ひよつとすれば今夜でも、明日
でも受けることになるかも知れませぬ。今一度かうして黙想すること
があるか分りませぬ。聖パウロは仰しやつた「我等みなキリストの法

庭に於て顯はれ、或は善、或は悪、各肉體にありて爲し、所に報いら
るべければなり」(コリント後)と。

して天主様の法庭には、唯だ私一人が一生の間に行つた善と悪とを
背負つて立ち顯はれるのです。誰とて私の爲に辯護したり、言譯した
りして呉れるものはありません。自分で、何も彼も、思つた通り、言
うた通り、爲た通り白状せねばなりません。

判事は誰かと云へば、限りなき御智慧を以て、萬事を見抜いて居な
さる天主様ですから、何一つ隠すことも出来ねば、欺すことも出来ま
すまい。院長を欺すことは出来ませんでしたらう。朋友を欺すことは出来ま
したらう。告白場で司祭を欺すことも出来ませんでしたらうが、天主様を欺
すことは出来ずまい。何んでも見て居なさる、聽いて居なさる、知

つて居なさるのですから。

猶ほその判事は極めて正義の天主様で、賄賂を使つて其意を曲げさすことは出来ませぬ。極めて能力ある天主様で、何人だつて之に抵抗することも出来ませぬ。極めて厳格な天主様で、もう其時になつては、泣いたつて、叫いたつて、情を掛け給ふことはありません。無上の判事であらせられるから、一旦判決が下されてからは、それに不服を唱へて控訴することも出来るものではありませぬ。

二、審判の状況。

斯れほど恐るべき判事が私に向つて『汝の勘定を差出せ』(ルカ一六)と云つて、直と、綿密に、容赦なく、嚴重に私の一生を御糺しなさるのであります。

『綿密に、私の載いた才能に就て、聖寵に付て、救靈の方法、犯した罪、務めた役目に就て、一々取糺しなさる。祈禱文まで、修道院の規則書までも引出して来て、『斯うすべきであつた、斯うすると約束した、果して其約束を守つたか』と御調べなさるであります。

『容赦なく、すべてを正義に照らして御審きなさるから、決して意味を曲げて解釋をしたり、言譯をしたり、口實を設けたりすることは許されずまい。』

たゞ行爲その物を調べなさるばかりではなく、その行ひ方までも糺しなさる。唯だ祈つたか云ふのみならず、善く注意して祈つたか否か、唯だ聖體を拜領したか、長上に従うたか云ふのみならず、熱心に拜領したか、快く従うたか云ふことまで問糺しなさるであります。

「嚴重に」、「人の上に立つものには最も厳しき審判あるべし」(智ノ書)と云へば、私の如き修道者は、嚴重の上にも嚴重に裁かれる筈でありませう。私は主の淨配として、主の御家に住み、主の御側近く待つて、特別の御寵愛を蒙り、主の御旨をよく悟つて居るのでありますから、もしも大罪を抱いたまふ法庭に立つことにでもなつたら、今更ら情をかけられ、罰を輕められる理由は一つもないのであります。

斯の如く主の審判は、思つたばかりでも、ぎよつとして冷汗の流れる位に恐ろしいのですから、何時もく用意して居なければなりません。ぬが、私には果してその用意が出来て居ますか。

あゝ主よ、審判の日に先ちて、私の罪を赦し給へ。アメン。

四、修道者の審判。

私は唯今ま天主様の法庭に立たされて居ると想像しませう。

審判と一口で云つても、冷淡な修道者の受けるのと、熱心な修道者の受けるのとは、天地も管ならぬのであります。

一、冷淡な修道者

が、始めて主の法の庭に立つ時は、ごんな心持がするでせうか。修道院に召された大きなお恩恵、その聖い身分や重い責任や、その責任を盡すが爲に與へられた数々の方法などを眼前につき出された時、「我は汝を千萬人の中より選み出して、我が愛する淨配となし、我が家に召し入れて、朝夕、可愛がつてやつたに、汝は何うなつた。何を以て斯る大恩に報いた。幾度か我が後に跟いて進むやうに勧めもすれ

ば、勵ましもし、引立もした、強ひて引立てもした。それに汝は幾度も、立派に約束はしながら、我に従はなかつた。せうことなしに、ぬらりくらりと歩いて来たではないか』と咎められる時、

次に天主様が、此修道者を他の熱心な修道者と比べ、敬虔な俗人と比べ、罪人と、修道者自身とも比べて、『汝が初めて修道院に入った頃は、如何にも熱心であつた、餘つぽど従順に、貞操に、謙遜に秀で、居たが、後ではごんなに墮落して了つた……我は汝を修道院に送る時は、汝が必つと我が意に適ふ修道者になるであらう。罪人を歸化らし、多くの人を聖ならしめるであらうと末頼母しく思つて居たのである。然るに汝は忠實な奴婢とはならず、怠慢勝ちな奴婢となつた。熱心な修道者とはならず、全く世間的の修道者となり、快樂に耽り、怒

り易く、傲慢に流れ、榮譽を戀ひ慕ふに至つたではないか、我を退け、煉獄の火の中に落ちて、汝の冷淡を償へ』と申渡される時、

あゝ其時こそ、彼の修道者は如何なる心持がするでありませうか。之に反して

二、熱心な修道者

の喜悦を想ひ見なさい。始めて天主様の尊前に立出た時、その優しい聖顔を仰視たばかりでも、言ひ知れぬ歡樂が心に溢れ出るのを覺ゆるでありませう。

況んや天主様が之にその難有い攝理を説明して、『汝に斯々の災難を下したのも、汝をこの凌辱に遭はせ、この疾病に悩まされたのも、つまり汝に徳を煉らせ、行を研かせる爲に外ならぬのであつたよ』と曰

ふ時。

一生の間、天主様の爲に凌いだ有ゆる痛苦や、骨折や、流した汗滴、爲した働やを残らず眼前にお持出し下さる時、

親しく天主様の御口より、「善にして忠なる僕よ、汝の主人の喜悅に入れ」(マテオ二二)と云ふ難有い宣告を承る時、

あゝ其時こそ如何なる喜悅に胸は躍り、心は飛び立つ思ひがするでありませうか。

イエズス様、私は之を默想する毎に、彼のダビドが歌ひました『往きて泣いて種子をば下しけり』(詩一三)と云ふ一句を思ひ出さずには居られませぬ。良き修道者の一生は實に勞苦である。勞苦して、徳の道をスタ〜と歩くことである。肉慾が猛り出しても、惡魔が襲ひ

蒐つても、災難が落ち重なつて來ても、少しも厭はずに、毎日〜徳より徳へと進んで行くことである。往きて往いて泣いて徳の種子を下し、收穫の用意をすることあります。然るに一朝靈魂がこの肉體に離れて、主の法庭に立ち顯はれる時は『來て來ては禾束を背負ひて躍り喜ばん』(詩一三)で、現世で働いただけ、苦んだだけ、難んで、泣いて、嘆いただけ、大なる喜悅、大なる光榮に満ち溢れるであります。あゝ主よ、私を熱心な修道者となし、安心して主の法庭に立顯れるを得せしめ給へ。アメン。

五、天國の道。

數限りなき天使聖人等が、天國に楽しんで居られるのを仰視ると想像

しませう。

一、天國に登るには、常ならぬ道によるの必要はありませぬ。聖人等は何うして天國に登られました。奇蹟を行つて、人が真似も出来ない様な驚くべき徳行を修めて、ありましたか。それならば私の如き罪人は、逆も天國には登れぬものと諦めねばなりません。聖人と云ふは決してそんな御方ばかりではありませぬ。

例へば彼のイエズス會の聖ヨハネ・ベルクマンズの如きは、聖スタニスラオ、聖アロイジオと並び稱せられるほどの聖人であるが、然し其傳を讀んで見れば、別に人に飛び抜けたことを行つた御方とは思はれない。たゞ普通の事を等閑にせずして、熱心に、忠實に、念を入れて勤められたと云ふだけでありました。起床する時が來れば、人並に起き

て居られたが、唯だ愚圖くせず、迅速く、慎と信心を以て起きられる所が違つて居ました。默想も人並にして居られたが、唯だ違ふ所は、其の注意深い、恭しい、熱心な点でありました。ミサにも一樣に參與つて居られたが、唯だ違ふ所は其の活々した信仰、燃ゆるが如き愛情でありました。人の如く聖體も拜領して居られた。唯だ愛熱を燃やして、なるべく多くの利益を得るやうにと務めて。人並に勉強もして居られた、然し一心不亂になつて、天主様の光榮の爲にと云ふ意向を定めるのを忘れずに。人並に食べても居られた、唯だ中庸を守り、肉体の養よりも寧ろ靈魂の養に注意する位にして。人に劣らず困難にも遭はれたが、唯だ強い忍耐を以て、否な喜んで、心より天主様に感謝しつゝ之を推し堪へられた。一口で言へば、普通の事を常ならぬ心

掛けで、務められたと云ふだけでありません。

ですから常ならぬ事をせずとも、人に飛び抜けた善を行はずとも、心掛け一つでは随分と聖人にもなれる、天國にも登れる。然らばと云つて、少しの努力も要せぬと云ふ譯ではありませぬ。

二、天國に登るには大に奮發せねばなりません。

『天國は暴力に襲はれ、暴力の者之を奪ふ』(マテオ一)とか、『我後に跟きて來らんと欲せば、己を棄て己が十字架を取りて我に従ふべし』(マテオ一六)とか、『生命に至る門は窄く其路も狭し』(全上七)とか云ふ主の聖言は、何時になつても變ることはない。ヘルクマンズ聖人でも、何の戦も經ずして、易々と聖人となられたのではありませぬ。聖イグナシオが口僻の様に、『己に克て』と教へられたのを善く心に止めて、始

終我身に克たう我身に克たうと務められた。善く祈るが爲に、善く働くが爲に、善く黙るが爲に、善く物言ふが爲に、善く些細の規則までも守り、すべての兄弟を愛し、心より長者に従ふが爲に、幾ほご我身に注意して、我慾に打克たうと力められ、幾ほご自然的人間を打破つて、超自然的人間にならうと力められましたでせうか。

私も修道者の身であれば、必ず聖ヘルクマンズと共に、『私は聖人になりたいたい、是非とも聖人になりたいたい』と望まねばなりません、それを望む證據として、

- 一、ますます罪を少くなすやうに、
- 二、日々に不足過失までも減少すやうに、
- 三、日々の務を、日増しに善く、完全に盡すやうに、

務めねばなりません。随つて毎日、特別糺明をなし、屢々告白をし、何を爲るにも、それが一生の仕納でもあるかの様に、念を入れて致すが肝要であります。

六、イエズス様の聖心に不愉快と思召し給ふ事。

イエズス様がマルガリタ マリアに顯はれて、聖心の御悲哀を訴へ給うた時の場合を想像しませう。

イエズス様の聖心に不愉快と思召し給ふ事は、世間的精神と、冷淡と、罪愆とであります。

一、世間的精神

イエズス様が此世に御降り遊ばしたのは、何事に就ても、世間の精

神に反對する爲でありましたから、世間の重んずる所を、イエズス様は却て之を輕じ、世間の愛する所を、イエズス様は却て之を厭がり、世間の望む所を、イエズス様は却て之を避け給ふのです。

世間が『幸福ならんと欲せば財寶を求めよ』と云へば、イエズス様は之に反して『福なる哉、心の貧しき者』と叫ばれる。世間が『幸福ならんと欲せば仇を返せ』と云へば、イエズス様は之に反して、『福なる哉、柔和なる者』と曰ふ。世間は、『幸福ならんと欲せば快樂に耽溺れ』と云ふのに、イエズス様は『幸福なるかな泣くもの』と仰しやる。世間は『幸福ならんと欲せば、情慾を恣にせよ』と云ふのに、イエズス様は『幸福なる哉、心の潔きもの』と仰しやる。世間が『幸福ならんと欲せば、なるべく反對を避けよ』と教へるのに反して、イエ

ズス様は『幸福なる哉、迫害を堪へ忍ぶもの』と教へなされる。世間が『幸福ならんと欲せば上に登れ、務めて人自に立たんと務めよ』と勧めるのに反して、イエズス様は『末座に就け、己を卑下げるものは揚げられる』と勧めなされる。

世間の精神は、人を滅亡の穴に突き落とし、イエズス様の御精神は人を眞の生命に引上げる。然らば修道者の身でありながら、イエズス様の御精神に背き、良からぬ世間の精神に買れて居るが如きは、聖心の最も不愉快に思召し給ふ所であります。

今ま私の思、言、行は果してイエズス様の御精神に反対しては居ませんか。あゝイエズス様、私も是からは是非とも主の御精神と一つになつて、世間の愛する所を怖れ、世間の怖れる所を愛したいものであ

ります。

二、冷淡

聖心は深く修道者を愛しなされるから、その害となる事は何んでも御厭ひ遊ばすのです。所が修道者の爲に何よりの大敵で、容易ならぬ害を來すものは冷淡である。聖書にも『神の事を怠慢に行ふものは詛はる』(エレミヤ四)とあるが如く、冷淡に流れると、終には天主様の詛を招くやうになります。

『汝は温し……將に我口より汝を吐出さんとす』(黙示〇三)、冷淡に流れて、天主様の詛を招けば、とゞのつまりは天主様から排斥されて了ふ。生温い湯が飲心地の悪くて、直にむか〜と吐き出したくなる。が様に、冷淡な修道者も聖心を苦め、嘔吐を起させて、吐き出させて了

ふ。用心すべきではありませんか。

三、罪 愆

イエズス様は聖櫃の中より仰いで天を眺め、悪天使から捨られた坐席の今だに空しうして居るのを見給ひ、伏して地獄を臨めば、數知れぬ靈魂の消えざる火に焼けて居るのを見、現世が罪の爲に物凄じき墓場、悲しい涙の谷となつて居るのを見、終に眼を廻らして、御自分が恐るべき責苦を凌いだカルワリオの頂を熟々と打見やり給ふ毎に、罪の忌々しい姿が御目の前にありくと立顯はれるよと覺わ給ふと共に、斯くまで恐ろしい罪を、修道者の身にして犯すかと思ひ給うては、御胸も張り裂ける心地がせずには居られぬのであります。

あゝイエズス様、私も今までは、罪を犯して聖心を苦しめ申しまし

たけれども、せめて今からは斷然心を悔めます、罪を憎みます、恐れま
す、避けます。随つて誘惑に仆れない様、何時も氣を付けて、絶えず
祈禱もする決心でありますから、何うぞ聖寵を以て私のか弱い心を助
け給へ。アメン。

七、静修の終末の聖體拜領

一日イエズス様は、ペトロ、ヤコボ、ヨハネの三人を伴うて高い山
に登り、祈禱をなさいましたが、彼等の前で、御容が俄に變つて、顔
は日の如く輝き、衣服は雪の如く白くなり、モイゼとエリアとが現は
れて、イエズス様と物語を始めました。ペトロは喜悅の餘りに我を忘
れて叫び出しました、「主よ、善こと我等が此處に居るのは、思召なら

ば此處に三つの廬を造り、一つは主の爲、一つはモイゼの爲、一つはエリアの爲にしませう」と然う語つて居る時に、輝いた雲がイエズス様方を掩ひ、雲の中から「是ぞ能く我心を安せる我が愛子である。是に聽け」と云ふ聲が聞えました。弟子等は其聲に懼れ、倒れ伏して「ひますと、やがてイエズス様が近いて彼等に觸れ、『起きい、懼るゝな』と曰うたから、目を舉げて見れば、イエズス様の外には誰をも見なかつたと云ふことであります。

一、此の不思議な出來事が、今ま私の爲にも行はれます。私は彼の使徒等の如く、イエズス様より特に選まれ、世間の危い中から、主の聖家に招き入れられて修道者となり、毎日、澤山の恩恵を施される上、今や此の静修によつて、謂は、高い山の上に登らして

戴きました。即ち外からは説教を聽かされ、内からは聖寵を與へられ、情慾や、不熱心や、罪惡やの霧深い谷底から心を高く、引上げられて、罪を避け、善を行ひ、心には云ひ知れぬ平和を樂しむことが出来るやうにして戴きました。何と云ふ難有い聖恩でムいませう。

其上、今日は主が躬ら私の心に臨幸で遊ばして、ゆるくと其の美しい、愛らしい、聖い御姿を眺めさうとして下さる。パンの形色の眞白いを見ては、流石に雪を欺く白い衣服を思ひ出し、日の如く輝いた聖顔を偲ばすには居られませぬ。實に今日こそはイエズス様が、私の爲に御容を變へ給ふのであります。

二、是ぞ能く我心を安せる愛子である。

あゝ祭壇の上なるイエズス様は、御容を變へられた當時と同じく、

矢張り永遠の父の御子、天地萬物を造り給うた全能の天主様、僅かの汚點でも忌み嫌ひ給ふ聖の聖なる天主様、人の心の底までも洞察し給ふ全知の天主様、生ける人と死せる人とを審いて、其善惡に應つて嚴重に賞罰を下し給ふ正義恐るべき天主様であらせられます。此天主様が、信徳の眼から見れば、光つた雲とも謂ふべきパンの形色の中に隠れて、祭壇の上になすのです。

然らば私も使徒等の如く、主の尊前に拜伏しませう。主の限りなく大にして、我身の有つても無きが如き憐れな有様を思ひ、平伏して禮拜しませう。主の限りなく聖にして、我身の汚らはしいことを思ひ、深く謙遜しませう。主は聖體の中にその御威光を窺ひ、御威力を藏して、唯だくその御愛のみを顯はし給ふのではありませんか。

見なさい、使徒等に近き給うた如く私にも近きなさる。使徒等の身に觸れ給うた如く、私にも御手を觸れようとして下さる。否な私の心に降り、私と一致し、一つ身ともならうと思召し給ひ、連りに私を促して『起きよ、我に來れ、疾く聖臺に近き、懼れるな』と、言葉さへ優しく御招き下さるのであります。然らば私は深く頼むの心を以て、

三、主の御招に應ひ、進んで聖臺に近きませう。

あ、私は臆てイエズス様を拜領り申すのであります、さてイエズス様が、その尊い御身を残らず與へて下さる御愛に何を以て酬い奉ることが出来ませう。たゞ私も主に一身を献げ、主の如く容を變へ、光り輝いてこそ御恩の萬一に報ずること出来る譯であります。『主よ、善いこと我等が此處に居るのは』世間の騒ぎに遠かり、冷淡、不足、

罪科の谷底を離れて、物静かな主の御家に止り、祈禱や、黙想や、敬虔の勤や、人を愛し、主を愛すると云ふやうな善徳の高い頂に攀ち登つて、主と共に楽しい月日を送るのは、如何に幸福でムいませう。『思召しならば、此處に廬を造りませう』。否な主の聖櫃こそ私の爲には、何よりも楽しい廬で、私は何時迄もく此處に止りたいのであります。この廬の中に止つてさへ居れば、きつと主の如く立派な姿に成り變ることが出来る。私は静修を終へて、復た平生通りの生活に戻らねばなりません。然し外部に見ゆる所は、前と同じ労働をして居るやうでも、實は全然く見違へたものにならねばなりません。是からはイエズス様と共に明し暮して、暫くでもイエズス様を離れてはなりません。使徒等は『イエズス様の外に誰をも見なかつた』と云ふことであるが、

私も左こそありたいものであります。即ち長者を見てはイエズス様と思ひ、イエズス様の如く之を敬ひ、朋友を見てはイエズス様と思ひ、イエズス様の如く之を愛し、幸福に出遭しても、禍殃に出遭しても、イエズス様の聖意と思つて喜んで推し戴き、働く時はイエズス様の御働を見るところで、イエズス様の如く忠實に働き、従はねばならぬ時は、イエズス様の御従を眼前に眺めると思つて快く従ひ、誘惑に遭ふ時は、イエズス様が荒野に於て、悪魔の誘惑を見事に打破りなされるのを仰視すると思つて、勇ましく戦ひたいものであります。

● 一口で言へばイエズス様の外には誰をも見ない。イエズス様の外には誰をも愛さない、愛するとすれば唯だイエズス様に對して愛する。唯だイエズス様の愛せよと命じ給ふものだけを愛したいものであります。

す。イエズス様が私を愛して下さつた、私の爲に死んで下さつた、私と一致するが爲に、態々聖體の中に止り下さると思つたならば、何うして一心とイエズス様を愛せずに居られませうか。

要するに現世でも來世でも幸福にならうと思はゞ、今ま私の登つて居る此の山の上に止まることにせねばなりません。静修の決心を忠實に守り、何時迄もイエズス様の御友達であるやうに、否な自分が小さいイエズス様の如くなつて、是迄とは全く違つた容になり變り、何時も其の立派な姿を失はないやうに心掛けねばならぬのであります。

一、感すべき一少女の物語 (福者ウヰアンネー師の説教集第一卷一六頁)

何時頃の事であつたか、フランスにドロテアと云ふ少女が居ました。萬事イエズス様をお模範として、小供ながらも驚くべき完徳の域に進んで居たのですが、一日教會の受持靈父から其方法を問はれて、次の如き物語をしました。

少女「私は朝、目を醒まして起きる時は、幼いイエズス様が目を醒ますや、己を犠牲として御父に献げ給うた時の場合を思ひ出して、私もそれに則つて、天主様に我身を犠牲に供へ、その日の思、言、行を殘らず献げます。』

「祈る時は、イエズス様がゲツセマニの園に於て、地に平伏して御父に祈られたことを思ひ浮べ我身にその美はしい御心持を汲み取り

ます。』。

『働く時は、イエズス様が私の救霊の爲に、疲勞をも厭はず働かれたことを思ひ、苦情なぞ言はずに、私の勞働をイエズス様の御勞働に合せて献げます。』。

『何かを人に命せられた時は、イエズス様が聖母マリア、聖ヨゼフに快く従はれたことを思ひ出して、私の從順をイエズス様の御從順に合せます。その命せられる事が幾ら辛い難かしいことであつても、イエズス様が私を救はんが爲に、十字架の上に死ぬ迄も従はれたことを思ひ、喜んで引受けます。』。

『人から無理なことを爲れても、失禮なことを言はれても、イエズス様が甚い〜凌辱を受け、讒言され、無理非道に責められ、苦められ

ても、黙つて、小言なぞ言はずに堪へられたことを思ひ出します。而かもイエズス様は罪が無かつた、苦を受けなざる筈ではなかつたのに、私は却て一方ならぬ罪人であれば、責められ、苦められるのは當然ぢやと思つて、ちつと耐へ忍びます。』。

『食事の時は、イエズス様が粗末な食物を慎み慎んで食べて、御父の光榮の爲に働く力を養はれたことを思ひ起します。もし何か口に適はないものを食べさされる時は、イエズス様がカルワリオの頂で、苦い膽を嘗めさせなされたことを思ひ出して、私の食慾を犠牲にします。腹が空いた時、或は食べる物がない時は、イエズス様が四十日の間も、夜、晝、何にも食べずに、甚い饑さを堪へて、私の飲食の罪を償つて下さつたことを思ひ、不満の意を表さないやうにします。』。

『遊ぶ時、人と談話をする時は、イエズス様が何人に對しても、柔和で、親切であらせられたことを思ひます。』

『悪い話を耳にする時、人が罪を犯すのを見る時は、イエズス様が御父の人に背かれ給ふのを見て、如何ほど御心を痛めなされたかを思つて、直と天主様に赦を願ひます。世界中には幾れほどの罪が毎日／＼犯されて、天主様が幾れほど背かれ、凌辱められ給ふかと云ふことを思ふ毎に、私は悲み嘆き、イエズス様が御父に向つて、「正しき父よ、世は汝を知らず」(ヨハネ一七ノ二五)、と曰うた時の御心持を思ひ浮べます。』

『告白をする時は、イエズス様がゲツセマニの園でなり、十字架の上でなり私の罪の爲に悲み痛みなされたことを思ひ出します。』

『ミサ聖祭に參與する時は、イエズス様が祭壇の上にて、御父の光榮、罪の贖、諸人の救靈の爲に、御身を犠牲に備へ給ふ御意向に私の意を合せます。』

『何かの歌を聴く時は、殊に天主様を讚美する歌でも聴く時は、大變に喜びまして、イエズス様が聖體を御定めなされたから、使徒等と共に、天主様を讚美して御歌ひなされた歌のことなどを思ひ出します。』

『床に就く時は、イエズス様が御父の光榮を計るに要する力を求めんとて、御休息み遊ばしたことを思ふか、或は又た私の床は、イエズス様が温しい羔の如く、御生命を献げなされた十字架の床に比ぶれば、餘つほど違つて居るよと思ひ、イエズス様と共に「父よ、我が精神を御手に托せ奉る」と申しながら眠に就きます。』

靈父は此の年少い田舎娘が、此れほどまで善く解つて居るのを見

て、甚く感心し、

『靈父』ドロテアさん、貴女はほんに福な人です、そんなにして暮して行けば、何んな慰安があるでせう』と

仰しやれば、少女は大人しく答へて、

少女『ハイ天主様に御仕へするには慰安があります。然し亦た随分と激しい戦もせねばなりません。人々の冷笑を堪へるが爲に、燃わ狂ふ情慾の火を鎮めるが爲に、餘つほど我身に無理をせねばなりません。天主様は私に大きな聖寵を恵んで下さいました。然し亦た惑誘にも遭はせなされる。氣が苛々してならぬこともあります、祈禱をするのが厭になつて困ることもあります。』

『靈父』厭な氣を抑へ、誘惑に打勝つ爲には、何うしますか』

少女『心が苦しい時は、イエズス様がゲツセマニの園で、死なんばかりに苦み悲まれたことを思ひ出したり、十字架の上で、皆んなに捨られ、何の慰安も受けずに御死去あそばしたことを思ひ出したりして、御旨の儘に計ひ給へと申上げます。』

『誘惑に遭ふ時、例へば良からぬ朋友の中へ行きたい、夜遊に出て見たいと云ふやうな心が起る時、其他すべて罪の激しい誘惑にかゝる時は、イエズス様が私を戒めて「なに御前は私を捨て、世間と其快樂とに身を捧げようとするのであるか。一旦私に献げた心を取り戻して、之を悪魔や世間の快樂に付さうとするのであるか。私に背くものは澤山居るではないか、御前までが御仲間に加つて私を棄てようとするのか」と曰ふやうに想像して、直に心の底から答へます、「否、イエズス

様、私は決して主を棄てませぬ。死ぬまでも決して棄てませぬ、私は主を棄て何處へ行きませう、主は永遠の生命の言を有つて居なされるのですのに」と、斯う申しますれば、意外に力を得、勇氣を増して参ります。『靈友と談話をする時は、何んなことを語りますか。』
少女『唯今ま私が御遠慮なく申上げましたやうなことを話します。何をするにもイエズス様を御手本とするやうに、祈るにも食べるにも、働くにも談話するにも、嬉しい時も、悲しい時も、イエズス様がそんな場合に何う云ふ風になさつたかと思ひ出して、其の聖い行動に合せるやうに勧めます。イエズス様の御手本に倣ふよりも優れて立派なことはない。こんな立派な御主様に仕へるより楽しいことはない、と云ふ様なことを話します。』

實に感心な少女ではありませんか。我々も之に則つて、何時でも何をするにも、イエズス様ならば斯う云ふ場合に何うなさるであらうかと思ひ、萬事イエズス様を模範と仰いで行つたならば、この佻しい涙の谷に暮しながらも、早や天國にでも居るかの様に、楽しい月日を送ることが出来るであります。

二、吾主の御涙 (靈魂の價值) (全説教集 第二卷)

イエズス様は、一日エルザレムの町をつぐぐと打眺め、やがて其上に襲ひ來るべき禍殃を思ひ遣りて、不憫の情に堪へず、熱い涙をハラ／＼と零して、『汝も若し汝の此日に於てだも、汝に平和を來すべきもの、何たるかを知りたらば福ならんに、今は汝の目に隠されたり』

(ルカ一九)と嘆息されましたが、思ふに此時イエズス様は、唯だエルザレムの不幸を嘆き給うたばかりではありますまい。今の世の人々が、毎日／＼數限りなき聖恩を浴びせられながら、それに背いて自ら滅亡の淵に沈み行くのを見て、それまでも併て悲み給うたものに違ひありませんぬ。御自分の御苦難、御死去の功德は、千の世界を贖うても餘りあるのに、それが多くの人々には却て仇となり、一層悲むべき不幸を招くの動機ともなるのを見給うては、一方ならず御胸を痛めて、「我血や、我苦難やが唯だ汝等の救靈に益せぬばかりならば未だしも、却て御父の御怒を招く原因ともなるとは!!!」と慨嘆き給ふのも無理からぬ次第で、是とても畢竟世の人が、

一、靈魂は如何に貴いものであるか、

二、イエズス様はこの靈魂を救はんが爲に、如何な辛い目を見給うたか、

三、其反對に惡魔は之を滅ぼさんが爲に、如何ほど働いて居るか。

と云ふことを篤と默想へないからであります。然らば

一、靈魂は如何に貴いものであるか、

何人しも靈魂の眞價を充分に辨へたならば、之が爲に骨を碎き、身を粉にしても厭はないであります。然し靈魂の美質、美德を残らず悟り盡せるものは、唯だ天主様お獨りで、人には逆も夫れだけの力はありませんぬ。然し天も地も、天地の間にありとしあるものは、皆な此の靈魂の爲に造られたものであると云ふ点から考へれば、その價値

の程は察せられぬではありませぬが、更に歩を進めて、靈魂その物は天主様に像りて造られ、天主様の如く物を識り、之を愛し、之を自由に選擇む能力を備へて居る、と云ふことを思つたならば、靈魂の貴い所以も、朦げながら悟られるであります。

靈魂は天主様に像られて居るから、天主様の如く無形で、始こそあるが終なく、その智慧は能く天主様の限りなき御徳をも悟り、その行爲は總て天主様の光榮ともなることが出来る。今でも至聖三位の御寵愛を辱うして居るが、後々は永遠窮りなく天主様を讚美し、その福樂を以て己が福樂とするほどの難有い運命を脊負つて居る。何を爲るにも全く自由で、天主様を愛しようとも、愛しまいとも心の儘である。然し幸にして天主様を愛することになれば、自分も天主様に愛され、

此方が天主様に従ふのではなく、天主様が喜んで此方に随ひ、何事でも望み通りに爲て下さる。己を抛つて天主様に事へて居る靈魂の願望の届かなかつたと云ふ話は、開闢この方、未だ曾て聞いたことない位であります。

して又た此の靈魂の願望の大きいこと、言つたら、之に世界の總ゆる財寶を興へても満足するものではありません。天主様の爲に造られたのであるから、唯だ天主様だけが十分にその願望を飽かしめること出来なさる。語を換へて言へば、靈魂は天主様を愛することが出来る。天主様を愛することの出来るのは、靈魂の爲に何よりの幸福で、實に天に於ても地に於ても、その唯一の財寶として憧憬れる所、その無上の快樂として冀ふ所は、唯だ天主様のみであります。

終に靈魂はよく天主様に仕へて、事毎に天主様の光榮を計ることが出来る。聖意に適ひたいと云ふ意向さへ立て居れば、其の爲ることは如何に拙いことでも夫々に天主様の光榮になる。靈魂の此世に於ける課業は、天使等の天に於ける課業と變つた所はありませぬ。唯だ天使等は面りに天主様を打眺める、靈魂は信徳の眼を以て之を視る、と云ふ点が違ふだけであります。

靈魂は斯くまで貴く美はしいので、天主様はその保護方を天の大宮に侍つて居る天使に托け、之が食物には御自分の禮拜むべき御體を供へ、之が飲料には其の價貴き御血を與へ給うた。聖アムブロジオの御説によれば、『天主様が靈魂を貴重にし給ふこと、來ては非常なもので、もし靈魂が世界に唯つた一位しか無かつたものとしても、喜んで其爲

に死んで下さつたであります。もし天國が造つて無かつたものとするれば、この一位の靈魂の爲にでも態々御造り下さつたに相違ない』と云ふことであります。イエズス様も嘗て聖女テレジアに向つて、『汝は極く／＼我意に適つて居る。もし天國がないものとするれば、唯だ汝一人の爲にでも、我は喜んで之を拵へて遣すであらう』と仰しやりました。

あゝ靈魂の價値と云ふものは大したものではありませんか。限りなき天主様でさへ之に満足を感じ給ひ、一度は之を慈愛の御胸に抱きあげて、永遠窮りなき福樂に酔はしてやらうと思召し下さるのであります。聖女カタリナは、一日天主様から靈魂の輝いた、美しい姿を見せて戴いて、甚く感心し、『あゝ天主様（覺えず叫び出しました）、もし信仰によつて天主様が唯一つ在すと教はつて居ませんならば、私は之

を天主様と見誤つて伏拜むでこぼいませう。こんなに美しい靈魂の爲ためですもの、御生命を抛ち遊ばしたのも不思議ではありませぬ」と。

靈魂の斯くまで貴く美しいことを思つたら、天主様が一位の靈魂の滅び行くのを見給うても、大層お悲みなさる理由わけが自ら明白になつて、此靈魂の美さを汚さない爲ためには、幾れだけ氣を配り、力を盡さねばならぬか、若しや不幸にして罪を犯し、その光を曇らし、之を死滅の穴に突き落すやうにでもなつたら、幾ら泣いてもく足りないので云ふことが察せられるであります。聖ベルナルドは申されました「私等の涙には三通りあるが、然し其中で功德になるのは、唯だ我罪を嘆き、兄弟の過失を悲む涙だけである。訴訟に負けて泣く、子を喪つて泣くのは、人情とは云へ、無駄涙である。肉の快樂を求め得ずして泣

く涙の如きは罪深い涙で、長の病に取付かれて泣くのも、格別詮なき涙であるが、唯だ靈魂の死滅を嘆き、その天主様に遠かり、天國を取失ふことになつたのを悲んで、零す泪だけは千金の價があるのですけれど、悲しいかな斯う云ふ涙は世に極めて稀少。之れも靈魂の死滅は、現世でも、來世でも、如何に嘆かほしい禍殃であるかと云ふことを、皆目悟らないからであります」と。

然れども昔から心ある人々は、靈魂が如何に價値あるもので、天主様も如何ばかり之を貴重にし給ふか、靈魂の死滅だけは、何うしても取返のつかぬ禍殃であつて、一たび靈魂を失へば、もう萬を失つたものである、と云ふことを能く承知して、非常に之を氣遣ひ、唯だこの靈魂を救はんが爲ばかりに、浮世を棄て、野山に隠れたり、修道

院に引籠つたりされたのは夥しいものである。その中でも

聖ヨハネ カリビタ

の如きは、到底常人の手本とすることは出来ないにしても、其傳を讀めば、何人しも感心して、天主様を讚美せずには居れない程であります。

ヨハネ カリビタはコンスタンチノポルの人で、幼少の頃から世間の虚しさを悟り、人に離れた、閑静な暮方を好んで居ました。或時町の近所に住んで居る一修道者が、エルザレムへ參拜する途次、コンスタルチノポルを過ぎ、聖人の兩親が兼々喜んで旅客を宿して居たものですから、其家に客となりました。ヨハネは斯人に就いて修道院の模様を尋ね、修道者等の聖い生活、感すべき苦行から、世間を離れて、

親しく天主様に交る愉快の言ひ知れぬ大なことなどを語り聽かされて、非常に感じ、一日も早くこの煩悶多き世間を振り棄て、修道院に引籠り、世間では味ふこと出来ない平和を樂みたいと云ふ願望が、遣る瀬なく起つて來ました。

兩親は色々と言を盡して、其志を變へささうとしましたが、聖人の心は磐石の如く、何時かな動く様子も見えませぬ。私は世間を遁れ修道者となりて身を終るやう、天主様から召されて居ますから、別に家を有たうなんて思ひも寄りませぬ。私には家督として唯だ聖福音書を一冊譲つて下さいと願ひ、終には親の泣言を五月蠅がつて、私に家を飛び出し、とある修道院に驅込みました。兩親は早速人を八方に走らせて行方を捜さしたけれども、何うしても手掛がありませんので、

唯だ毎日毎夜、泣き暮し泣き明かして居ました。

斯くて聖人は六年の間も修道院に隠れ、あらゆる苦行に身を委ね、行を研ぎ徳を煉つて居られたが、一日不圖、親の宅に歸つて見たい氣が起りました。『天主様は聖アレキシオに、二十年の間も親に見識られずして、而かも親の宅に住はして下さつたから、私にも然う云ふ恩寵を與へ給はぬこともあるまい』。斯う思つて修道院を出ると、恰もよし一介の憐れな乞食に出遭つたから、それと衣服を取換へました。豫て痛い苦行と、長い病の爲に甚く窶れ果て居る上に、今又たこの見る影もない襤褸に身を包んだものですから、何處から見ても前のヨハネとは見受けられませぬ。

是れならば逆も見識られる憂もあるまいと思ひ、勇み立ちて路を急

ぎ、やがて向遙に我家を望むや、拜跪いて天主様に自分の計畫を助け給はんことを祈り、いよく近いて見れば、もう夜が更けて戸は締まつて居たから、露に打たれて一夜を外に立ち明かしました。翌朝僕が見當りました、その見すばらしい姿に同情を催し、邸内に入らして、片隅の小さい一間に住はせることにしました。ヨハネは其處に寢起して、兩親の愛子に逃げられたのを悲んで、夜晝、涙の雨に袖を絞つて居られる様子を面前に眺めては、如何ばかり胸をぐられる思に泣いたでムいませうか。父は極く情厚い人で、我子とは知らねど、時々之に食物を與へて、懇に養つて呉れました。母も不親切な方ではなかつたけれども、ヨハネのむさぐろしい態を見ては、妙に胸がむか／＼して、何うしても近かれませぬ。愛徳の力で其の嫌厭な氣を抑壓けて、も居